平穏と争いの次元

ユウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平穏と争いの次元

【Nコード】
N8887W

【作者名】
ユウジ

【あらすじ】
毎日生きることが退屈な少年。世界、人、神に落胆し、誰とも接しない人生を歩んできた。家族も親戚もいない彼は、ある日、小さな鏡を見つける。なんの変哲もない鏡。だが、それが彼の人生を変えることになる。

第一話、次元の鏡（前書き）

はじめまして。作者のユウジと申します。前から考えていた物語を載せます。初心者ですが何卒（なにとぞ）よろしくお願いします。

第一話、次元の鏡

人生は理不尽だ。世界も、人も、神も理不尽だ。すべてが理不尽だ。だから俺は全てを諦めた。
生きることさえも諦めたい。だが、それだと、なにか負けているような気がして、嫌だ。だが、毎日が退屈で仕方がない。学校は行っているが、つまらない。家にいてもつまらない。外に出てもつまらない。遊び相手などいない。
家族もいない、知り合いなど俺にはいない。必要ない。欲しいと思ったことなどない。今日も、退屈な今日を過ごすだけだ。なのに、なんで、俺はあんな鏡に興味を持ってしまったのだろう。人生が変わるなんて知っていれば、関わらなかったのに……

第一話、次元の鏡。

今日も、朝から、退屈な学校だ。小学校、中学校、そして、高校ときたのだから、退屈で仕方がない。
やることなんて、ないし、授業なんて、受ける気にならない。だから、今日も屋上で昼寝だ。
……さて、行くか。退屈な高校に。

今日は、HRのなかで、クラス委員を決めるらしい。もちろん俺はやらない。やりたくもない。誰かがやればいい。
俺はそんなことやりたくない。だからさ、俺に票を入れたやつをぶっ飛ばしたい。ああ、殴りたい。

なんで、入れるのかがわからない。毎日サボっている俺にクラス委員なんて務まるはずがないじゃないか。
俺が一票、誰かが、三票、そのまた誰かが、五票、そのまたまた、誰かさんが二十一票で、最後のやつが圧倒的に勝った。よって、最後の奴がこのクラスのクラス委員だ。オメデト〜。
さて、皮肉を言ったあとはやっぱ、昼寝だよなぁ。屋上で寝るのが一番いい。まぁ、他にやることがあれば、俺だって、そっちに行くだろうが、な。

……ああ、風が気持ちいいな。毎回思うんだが、風だけは理不尽じゃないよなぁ。春はやっぱり、風がいい。
桜はうざいし（ちらちらして）やっぱ風がいい。ん〜、このまま、一生寝たい、なぁ……

「お……て。ね……。……起きなさい！」
「……んだよ、邪魔すんな。あー、誰だおまえ？」
「！、こ、こ、この！　サボりまぁあああああああ！！！　私は、お前のクラスの、クラス委員長だぁあああああああ！」
んだよ、こいつ。うるさい女だな。たしか、たー。たー、橘だっけか？　あ、そういえば、こいつ。前も俺の睡眠を邪魔したような気がする。あの時はあんましよく覚えてないが、そうだ、こいつだ。
「私は橘愛理！　よーく覚えておきなさいよ、不知火！」
「……うるさい。その雄叫びやめろ。お前は興奮した犬かなにかか？　ああ、そうならすまない。悪いことしたな。
んじゃ、俺は寝るからあっち行っててくれ」
「こ、こ、殺す！　殺してやるぅうううううう」

のわ！？　こ、こいつ、いま、脳天かち割ろうとしやがった。横に寝返りうったから良かったが、あのままだったら……。

「お前さ。ゴリラの力開放すんのもやめたほうがいいと思うぞ。誰も嫁にもらってくれｎ「死ねぇえええ」はぁ。

だから、やめろって。クラスの一番可愛いとか言われてる顔が台無しだぞ」

「え？　……そ、そう？　あんたもそうおもう、の？」

「Ｚｚｚ」

「……はぁ。こいつ。本当になんなんだろう。容姿はいいのに、誰とも接しない。誰ともしゃべらない。

成績はいいのに、誇らない。毎日屋上にきて昼寝だけして帰る。……あんた、人生もったいないと思わないの？」

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン。

……この慣れ親しいリズム。いいな。学校ではこれだけ理不尽じゃない。ああ、この音作った人に会いたい。

会ってお礼を言いたい。……さて、目覚まし替わりのチャイムが鳴ったことだし、帰るか。たしか、今日は、英語と、数学と、理科と、歴史、保健体育だったはずだ。家で勉強すれば十分行けるな。

毎日毎日、人は、忙しく仕事や、家事をする。その中に俺も含まれているが、生憎、俺はスローペースだ。

仕事は、怒られない程度にサボってやるし、家事は毎回長い。誰か

が文句を言うわけでもないし、言うわけでもない。だから、毎日ゆっくりできる。だが、今日は違った。学校からの帰り道、俺は、ゴミが集められている場所で立ち止まった。何かある。そう、なにかが伝えている。だから、俺はくさい臭いを我慢して、ゴミをあさり出した。

周りから変な目でみられようと構わない。その何かを見つけるまではやめない。

ゴミ袋四袋目に突入すると、もう慣れた手つきで、ゴミをあさる。手が汚れようと、我慢する。

「!? ……はぁ。なにかあると思ったら鏡か。結局俺は鏡を探してただけだと、そういうことか……。はぁ。なんなんだろうな鏡を漁る俺って……」

周りの視線をが増してきた俺はなんなんだ。……ああ、理不尽だ。理不尽すぎる。

「ったく、鏡なん、て？　あ、あれ？　なんか光ってるぞ。お、おい、どうなっｔ」

シュワアアアアアアア

あまりの光りの俺は目をつぶって光が収まるのを待つだけだった。

「くっ、やっと消えたか。まったく、なんなんだよ、この鏡は……。ってあれ？　鏡が、ない？　んな馬鹿な。

確かにさっきまで持ってたはずだ。なんで……」

「ねぇ、君。どっちのチーム？　アブダクト？　センティール？

ねぇ、どっち？」

は、はぁ？　なんだこのチビ。いきなり話しかけてきて。なんの話だ？　あ、アブダクト？　宇宙人に連れ去られるという意味だが、それはないな、多分。で、センティールは、たしかホテルにそんなのがあったような気がする。だが、今は違うだろ。

「ねぇ、どっち？」

ここは、どちらかを言っておくべきか。

「じゃあ、アブダクト」

「…………」

俺がそれを言うと、チビは口角をにやりと上げ、その小さいお手手を……を！？　じ、銃？　いや、落ち着け落ち着け、あれはおもちゃだ。おもちゃ。子供の遊びだ。……だがしかし、あの光沢はおもちゃにしては良く出来てるな。

ダン！

いや〜、本物みたいに銃弾が飛んできたな……。ん？　なんか。頬に液体が……。！？　こ、これ、血じゃないかよ、おいおい、まさか、こいつ。実弾、いや、本物の拳銃で俺に向かって撃ったのか！　やばい、やばいやばい、逃げなきゃ殺される。別に死んでもいいが、子供に殺されるのは嫌だ。逃げなきゃ殺される。

ビュンビュン飛んでくる実弾を、なんとか避けながら、俺は、見慣れたはずの街を疾走した。だが、何かがおかしい。こんなところに、

穴など空いてなかったはずだ。工事中か？　……いや、それにしては、穴が深すぎる。

ダン！　チン！

「っ」

おいおい、結構離したはずだぞ。なんで、飛んでくる。もしかして、あいつ、俺のことが見えてるのか？

いや、それはないな。人間の視力がいくら良くても、壁があることを見破られる訳がない。訳が、ないんだ……。

「なんで飛んでくるんだよぉおおおおおお」

蜂の巣にされるぐらいなら、俺は転落死を選ぶ。穴に飛び込んだ俺は、死を覚悟した。下は奈落の底みたいになっており、光が全く差していない。よって、この下は、、下水道か、はたまた、何もない地面か。どちらにしても、死ぬなこの速度は。

「ちくしょおおお、なんて理不尽なんだぁあああああ」

バシャァアア！！

「ねぇ、こいつ。なんだと思う？」
「ん～、わったしには、おっとこのこにみっえるなぁ。きゃははは」
「だが、この基地に部外者が入り込むなどありえんだろう。拙者には、センティールの刺客だと思えるが」
「いや、だが、こいつ。ＥＳＰが感知できなぃ。拳銃も装備してな

いし。丸腰だ。ただの男にしか見えないが……」
「いやいや、それはないよ、ESPが感じられないなんて、ありえない。僕みたいな歩兵にだって、ESPがあるのに」
なん、だ？　何か聞こえる。俺は死んだはずじゃないのか？　だが、この感触は、コンクリートだ。体も少しだが動くし、喉も乾いている。生きている？　そんな馬鹿な。俺は、鷹のトップスピードにも負けないぐらいのスピードで落ちたんだぞ。下が水であっても衝撃で死ぬはずだ。だが、紛れも無く、俺は生きている。……それにさっきから、なんか、俺ジロジロ見られている気がする。なんだ？」
「うっわ、起きたよ、みんな、ほらほら。うんわ〜、すんごいねぇ。きゃははは」
何がすごいんだがよくわからないが、ここは……。
「「「動くな！」」」
「は、ははは」
立ち上がった瞬間拳銃向けられたら、そうなるだろうよ。……いやまてよ。日本には銃刀法違反という物があったはずだ。なのになんだこいつら？　揃いも揃って、拳銃かよ。……あのチビといい、どうなってんだ、こりゃ。
「静かに、後ろをむきなさい。いいわね」
「は、はい」
無理だよ。逆らえんよ。逆らったら殺されるよ。ははは。
「よーし、真琴、徹底的にボディタッチして」

「あいよ」
うえ、男に触られるのは気持ち悪いな。っと、てめえ、今、股間握ったただろう。この変態め！
「お？　なんだこれ？　せ、せ……？　由利読んでくれ」
「は？　漢字も読めないの？　あんた？」
「悪ぃ」
「はぁ、仕方ないわね。えーっと、正倉学院生徒手帳。ふむふむ、正倉学院……」
「「「「えええええええええ！！！！！」」」」
うるさいな。なんだよ、何叫んでんだよこいつら。頭おかしいのか。たかだか、生徒手帳じゃねえかよ。
「あ、あ、あんた、正倉学院の生徒だったの？」
ん？　だったの？　なんかおかしいぞ、言葉が。俺は今でも学生だ。
「そうだが」
「……みんな、ちょっと」
険しい顔をして、俺から離れて、向こうに行った、あいつらは、時々俺を見ては、ひそひそと、なにかを、話し出した。
聞こえるだけ解釈すると、どうやら正倉学院というのは、最近閉鎖されたらしい。なんでも、戦いがどうのこうの。
……おいおい、閉鎖はないだろ。さっきまで、俺はそこにいたんだぜ。おかしいだろ。
「ん、んんう。えー、もう一度我々が納得するため、再度問います。

あなたは、正倉学院の生徒だったのですか？」
「ああ、というか、いまでも生徒だ」
「「「…………」」」

一同揃って、無言ですか。そうですか。……何か言ってくれ。これじゃあ、俺がおかしいようじゃないか。
俺はおかしいこと何も言ってないぞ。

「えー、では、そうですね。我々、アブダクトにあなたを招待します」
「？？？？」
「だーかーらぁ、私たちの仲間になりなさいってこと。わかった？」
「…………」

はぁ、もう何がなんだかわからない。一体何なんだよ。こいつら。

「私たちの仲間になりなさい！　もう、何度言わせるのよ」
「はぁ、そうですか」
「あ、あの由利をここまで怒らせたのはお前が三番目だ。気をつけろ。鬼が来るぞ」
「？？？？」
「だぁからぁあああ、私たちの仲間になれっていってんだろ、ごらぁああああ」
「はいぃいい。わかりましたぁあああ」

怖。めっちゃ怖。何こいつ。後ろに般若が見えたぞ。もう一度言う。怖！

「よろしい。では、真琴。彼を奥に」
「は、はい！」

手下？　にも怖がられてるなぁ。あいつ。……それにしても、ここは、考えにくいが、俺がいた世界の別次元だと推測できる。ありえないが、正倉学院が閉鎖されたんだ。それしか考えられない。……はぁ。本当に、理不尽だぁあああ。

第一話、次元の鏡（後書き）

はい、こんにちは（こんばんは）作者のユウジです。更新は毎日を目標としていますが、二日三日と空いてしまうかもしれません。まだ、書いたばかりなので、感想とかありませんが、見てくれた人はぜひぜひ、感想を書いてくれると嬉しいです。では、またお会いしましょう！

第二話、マインドエナジー

誰だって、人を嫌いになることがある。それは、俺だって同じだ。毎日毎回同じ奴に同じことを言われれば嫌いになる。なんで、こんなにも俺に構うのかがわからない。ただ、俺は一人でいたいのに。

第二話、マインドエナジー。

「さぁ、起きなさい！」

「がはっ」

な、なんだよ、朝から肘鉄で起こすか？　ふつう。……にしても、痛い。なんだこの痛み。

おかしい。女の肘鉄ぐらい、軽く痛いぐらいなはずだ。なのに、なんでこんなにも痛いんだ？

「あはは～　ゆりゆりの、鉄肘鉄初めてなんだ～？　痛い？　痛い？」

「痛い」

「きゃはっ。そりゃそうだよー。ゆりゆりの肘には鉄が埋め込まれたプロテクターがあるんだからぁ。あ、ほら、私のにもあるよぉ」

おいおい、なぜ、プロテクターをつける必要があるんだ！　というのは、抑えておこう。

この次元、いや、平行世界といったところか、ここには、おそらく平和というものがない。
毎日戦っているらしい。戦いなんて嫌だが、いつか、俺も戦うんだろうな。別に死んでもいいが、敵に殺されるなら、自分で死んだほうがましだな。

「さぁ、行くわよ！」
「お、おい、どこにだよ」
「いいから、ついてくる！」

お、女の手ってこんなに柔らかいものなのか？　なんか、懐かしいな。……はぁ。一体どこに連れていくんだ、こいつは。周りを見る限りだと、壁、壁、壁。すべて壁だらけだ。ただ、赤いランプがその壁を照らしてて、見人が見れば、美しいとか言うかもしれない。まぁ、俺は言わないがな。
それにしても、この空間、いや、基地か。なにかが、抜け落ちている気がするんだよなぁ。
勘でしかないが、な。

「なぁ」
「なによ」
「ここさ、不完全の基地なのか？」
「そんなわけないじゃない。ここはね。最新鋭のスペシャリストたちが、作った。鉄壁の基地よ。
不完全なわけないじゃない」

うーん、何かが抜けているような気がしてならないんだが、まぁ、大丈夫って言ってるなら大丈夫だろう。

「なぁ、一体どこ行くんだ？」

「…………」

「おい、答えろ」

手を振りほどいて、由利（だったか？）を睨む。こいつ、急に喋らなくなった。なんだ？

睨まれてると気づいたのか、あちらも、俺を睨んでくる。そんなに、睨まれてもな、困るんだよ。

俺は、ただ、どこかへ行くのか聞きたいだけなんだから。

「……あんたには、今日から、ここで働いてもらうわ」

「ん？　ここは……！？」

おいおい、なんでトイレなんだよ。ここでどうしろと言うんだ。

「そうね、まず、毎日、きちんと掃除して、どこか壊れてないか、確認しなさい」

「まぁ、まて。俺がここで働くというのは、百歩譲ってあるとして、置いといて。なぜ、ここで？」

「そうね、まず、あんたは、初心者、弱者、戦闘技術が皆無ね。だから、私はあんたを気遣って、弱いなりに頑張れるところを見つけてあげたってわけ。わかる？」

……こいつ。むかつく。ああ、むかつく。そうだよ、俺は弱いさ。力もないし、銃も握ったことさえない。だがな、あんまりにも酷すぎるだろ！　なんで、トイレなんだよ！　誰かがせめて、厨房とかにしてくれよ！　ああ、理不尽だ、理不尽すぎる。

「ま、がんばってね～　応援してるよー」

「おい、まt」

……くそ。なんなんだよ。ここで働けってか？　は、嫌だね。サボるからな。見張ってないお前が悪いんだからな。……さて、どこか昼寝出来る場所はっと……

「お、ここがいいな。誰もいないし」

なぜか草が生えているここは、そこだけが違う空間のようだ。誰も居ないし、昼寝にはうってつけだろうな。

「ん～　誰もいないのは、いい。気が楽だ。ふぁああ。もう、眠くて仕方がない。寝るか……」

『Ｗａｒｎｉｎｇ　Ｗａｒｎｉｎｇ　敵襲です。一時作業を止め、敵襲を撃退してください。場所は、三階。皆さん急いでくださぃ』

「ん？　敵襲？　……まぁ、俺には関係ないな。さて、もう一眠りするか……」

『危険レベルレッド。危険レベルレベルレッド。戦闘を止め、撤退してください。敵は未知数の強さです。撤退してください」

おいおい、起きてみたら、これかよ。……たぶん、あいつらは戦ってるんだろうな。俺には、もう、守る力、ない。五年前までは、剣道や、柔道、ボクシングが出来たが、もうできない。俺には、もう、誰かを助ける力なんて、ないんだ……。

人生は理不尽だ、人は理不尽だ、神は理不尽だ。人生はすぐ終わってしまう。人は争いを起こす、神は乗り越えられない試練を与える。全てが理不尽だ。人は理不尽だ。俺、不知火直也も理不尽な世界でで生きている。何かができるかもしれないとなんども思った。だが、俺にはもう力がない。誰かを守る力がない。だから、このまま、ここで……。

「くっそぉおおお、俺は、俺は、できないとしても、やってみせる！　理不尽なことなんて乗り越えてみせる！　さぁ、待ってろよ！」

もう、力は、ない。だが、何かできるはずだ。なにか、俺にできることが……

「はぁ、はぁ。ここか。！？」
な！？　なんだ、あれは。アニメに出てくる、あれかよ。……ああ、なんて理不尽なんだ。あんなのに俺が勝てるわけないだろ。だが、もう戦っているやつが、いない。戦えない俺は、けが人を運び出すことしか、できない……。
「おい、大丈夫か？　今は運んでやる」
「あ、ああ、あれは化け物だ。あんなのに勝てるわけがない。君も、逃げてくれ。僕を置いて」
「できるわけないだろ！　そりゃあ、俺だって逃げたいさ。でもな、理不尽な試練を乗り越えるんだ。だから、あきらめるな！」
「……君は、強いな。ああ、そうだな。諦めたらいけないな。よし、君。僕は後でいいから、由利さんを運んでくれ。彼女が一番重傷だ」
由利、か……。あいつは嫌いだ。だが、助けないのは、馬鹿がすることだ。俺は嫌いな奴でも助ける。
「っ。由利。お前……」
由利はあのロボットをその血が垂れている目で睨んでいた。あの時の目だ。あの時、俺があいつをにらんだとき睨み返した時の、目だ。……くそ、なんで、あきらめないんだ。もう、お前はよくやっただろ。俺は呑気に昼寝をしてたけど、お前はずっと戦ってたんだろ？
なら、もういいだろ。
そんな怪我で立ち上がるな。立ち上がらないでくれ。
「はぁ、はぁ。ぅ。がはっ！？　っ。まだよ、まだ終わってない。さ、さぁ、かかってきなさい。
センティールの最新鋭敵殲滅型ロボット。カミカゼ。まさか、あっ

ちがこんなものを作っているとは知らなかったけど。私には、まだ、切り札がある。っ!?　ぐっ。だけど、こ、これじゃあ、使えそうにないわね。「おい」なによ!　え、え、な、なんで、あんたがいるのよ!　下がってなさい!
ここは、私が、私がやるから!　あんたは下がってなさい!」

こいつ。まだ戦うつもりなのか。そんな華奢な体で、何ができるってんだ。もう、ボロボロじゃないか。目だって、もう片目しか開いてないじゃないか。

「さぁ、下がってなさい。何もできないあんたじゃ、足でまといよ」
「いや、戦うさ。俺だって何かできるはずさ。ん、こうか、よし」
「そ、そんな、ぼろぼろの拳銃で何ができるのよ!　教えてあげるけど、あいつの装甲は、あんたが持ってるベレッタ　Ｍ９２じゃ、貫けないのよ!　グレネードランチャーでも打ち抜けないんだら、そんな銃で何かできるわけないでしょ!」

うるさいな、こいつ。ぺちゃくちゃぺちゃくちゃ。黙ってるってことができないのか?

「さぁ。早く下がりなさい。あんたじゃ、何もできない。ここは私がなんとかするから!　早くさがってなさ　!?　ん、んーーーーーーーー」

い、いくら黙らせるからって、キスしちまったよ。あーあ、知らね、あとで、怒られるなこりゃ。
だが、なんだろう。キスをしていると、体が熱くなってくる。ああ、やばい。体が焼けそうだ。
なんだ、これ。熱すぎる。

ドクン、ドクン

血の巡りが、早い

ドクン、ドクン

心臓の鼓動が早い

ドクン、ドクン

力が入る

ドクン、ドクン

頭の回転が速い

ドクン、ドクン

「ぷは。あ、あ、あんた！　なにすんにょよ！　ふぁ、ファーストキスだったのに！」

「落ち着け。お前じゃ、なにもできない。お前が切り札とか言ってるＥＳＰは、レンサーチャイルドだろ？　あれじゃあ、あいつの装甲は破れないな。バーニングセラッシャーぐらいじゃないと無理だな」

「な、な、なんで知ってるのよ！　あの力は誰にも見せてないのに！　それに！　バーニングセラッシャー保持者は、アブダクトには居ないのよ！　全部、力がある、人は、みんな、センティールに寝返ったの……」

今ならわかる。ＥＳＰがなんなのか、アブダクト、センティールがなんなのか。この世界がなんなのか。全て手に取るようにわかる。
俺にはＥＳＰがないと判断されたが、俺には、あるんだ。ＥＳＰが。
誰かと接吻することで、発動するＥＳＰ。名前は、マインドエナジー。身体を強化するだけでなく、頭脳や、判断力。戦闘力が向上するＥＳＰ。だが、これは余りにも体に負担をかけるため、五分しか発動できない。だが、五分もあれば十分だ。あの装甲やろうを吹き飛ばすぐらいならな。

「どいてろ、死ぬぞ」
「あ」

あいつを倒すには、いま発動してるＥＳｐで、弱点である、頭にあるコアを、拳銃で撃つしかない。
だが、いくら弱点といっても、防弾ガラス並みの耐久力があるはずだ。それを破るには……

「由利。拳銃をいま何丁持ってる？」
「え、あ、三つだけど。それがどうかしたの？」
「俺のもあわせて四丁か……。あと一つ欲しいところだ」
「あ、あの、これ使ってください」

後を取られると、反応してしまう。これは、剣士やスナイパーが感じることだが、今の俺でも感じられる。

「ああ、ありがとな。それじゃあ、危ないから下がってな」
「は、はい！」

さて、この五丁の拳銃で同じところを撃つ。ひとりじゃできないか

もしれんが、今の俺ならできる。
ジャグリングの要領で、手に持った銃から順番に、撃てばいい。ただそれだけだ。
ダン！　ダン！　ダンダンダンダン！　チン！　チン！　チンチンチンチン！
まず、一丁、終わり。
ダンダンダンダンダンダンダンダン！！！！！　チンチンチンチンチンチンチン！！！！
二丁目終わり。
ダダダダダダダダダダ！！！！　チチチチチチチチチチ！！！！
三丁目、終わり。
ババババババババババ、ババババ！！！　キンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキン！
四丁目、終わりっと。
キュイイイイイイイインン！！　ダァアアアアアアアアアアア！！！！
五丁目……終わり。だが、最後のはおかしい。レールガンみたいだった。あの子にもらったこれは、一体なんなんだろうか？
ピシ、ピシ。

「あ、そんな。うそ、でしょ。あのコアにヒビが」

ピシ、ピシ、ピシピシピシピシピシ！！！！　バリィイイイン！

「ふぅ。疲れた。由利、よかった、な……」

「ちょ、ちょっと、なんでそこで倒れるのよ！　さ、さっきのキスのこと、説明してもらうんだからぁあああああ」

悲鳴のような声が聞こえる中、俺の意識はブラックアウトした。

第二話、マインドエナジー（後書き）

うーん、戦闘描写って難しいですね。うまく出来ているかわかりません。

もし、おかしかったら、ぜひ、教えてください。お願いします。

第三話、戦いの歴史

ガシャン！！！

「な、直也。あんただけは逃げなさい。早く！」
「？　なんで？　どうして逃げなきゃいけないの？　一緒にいたいよ」
「言うこと聞きなさい。これは、母からの最後の頼みです。さぁ、裏口から行きなさい」
「はい」

なんでだろう。お母さんが、酷く怯えているように見える。それに、なんで、僕が逃げなきゃいけないのかな？　でも、お母さんが言うんだ、きっと、意味がある。だから、言うとおりにしよう。

「……あんたはまだ、私の半分も生きていない。だから、だから、生きるのよ。直也」
「？　わかったぁ」

また、一緒に買い物行きたいなぁ。遊びたいなぁ。あ、あれ？　なんだろう、このしょっぱい水。
お母さんも同じのが出てる。なんだろう？

「早く行きなさい。また後で」
「うん」

なんだろう、この気持ち。胸がぽっかり空いたような、そんな感じがする。

「親分。これは、上玉ですよ」
「ほほ～。いいな。これはいい。さて、犯るか」
「あんたたち何か、呪われて死ねばいいのよ、死ね！」
「んだと、このアマぁ」
「い、いゃああああああ」

「……嫌な夢を、見た。忘れたはずなのに、なぜ今頃……」
もう、忘れたはずなのにな、なぜか、涙が出る。くそ、なんなんだろうな。涙って。
女が泣けば武器になる、味はしょっぱい、それが涙。……分かってはいるんだけどな。
涙が出る仕組みは。

コンコン

「ん？　入っていいぞ」
「失礼するわ」
うっわ。やっべ、思い出した。俺、こいつとキスしたんだった！

なんでよりにもよって、こいつがくるんだよ。……というか、ここどこだよ。俺、こんなとこ知らないぞ。

「べ、別に、き、気にしてないから。ファーストキスだったけど……。と、とにかく。あんたを、ひどく扱っていたことは謝るわ。ごめんなさい。……さて、今日から、あんたは、正式に、私たち、アブダクトの一員になりました」

「ふむふむ、そうか……」

まぁ、仲間にならないと蜂の巣にされかねないから、認めるが、なんで、こいつ、顔赤いんだ？ 熱でもあるのか？

「さ、さて。もう一つ言いたいことなんだけど……。あ、あんた私のＥＳＰ見破ったでしょ？ あれ、どうやったの？」

「ん？ ＥＳＰってなんだ？ なんかの略か？」

「え？」

なんか、聞いたことあるんだけど、思い出せない。なんなんだろうか。

「あ、あんた、ＥＳＰ知ってたじゃない。なんで知らないの！」

「おいおい、怒るな。まて、今思い出すから。……」

うーんと、思い出したぞ。ＥＳＰ ｅｘｔｉｎｃｔ ｓｉｌｅｎｔ ｐｏｗｅｒ（消滅した暗黙の力）の略だったはずだ。これは、マインドエナジーを発動したとき、頭に入ってきたが、今はこれしか覚えていない。

なんでだ？

「まぁ、覚えてないならいいわ。これから、私がみっちり教えてあげるから。覚悟しなさい」

こいつ。胸が無いかと思ったが、ちゃんとあるんだな。胸を張ったとき分かった。

……そういえば、こいつの容姿って、ちゃんと見たこと無いな。観察してみるか。

俺より少し小さい背（１６２ぐらいか）キリッとした、琥珀色のつり目に、雪みたいに白い肌。

直毛のセミロングな、栗色の髪。……動物に例えるなら、白い狼だな。

「なによ、何見てるのよ」

「いや、なんでもない」

全く、睨むと本当に狼そのものだな。俺もつり目な方だが、あそこまで狼っぽくはないはずだ。

前世が狼だったのかもな……。

「さて、説明するわよ。一度しか言わないからよく聞きなさい」

「ああ」

「まず、十年前、とある科学者が、ＥＳＰという力を発明した。この力を悪用させまいとその科学者は、信じられる者だけに、ＥＳＰの手術を施した。だけど、仲間が裏切り、ＥＳＰを高額な金で売ってしまった。そう、それからよ、それから、人々たちは、そのＥＳＰをめぐって、内乱を起こした。

その内乱は一年前まで続いた。……生き残りは居なかったわ。全員死んだの。幸い、全員大人だったため、未来のある子供は生き残った。そして、二年前。成長した私たちは、ある、男に、争いという火種をお越してくれれば、ＥＳＰをさずけよう。そう言ったの。も

ちろん、私たちは反対したわ。

けれどね、その男は、無理やり、私たちをさらい、勝手に手術を施したの。私たち、アブダクトは、その時の記憶を持っている人が大勢いるわ。だけどね。センティールには、手術の副作用で、記憶を失った人がたくさんいるの。それから、争いが始まったわ。私たちアブダクトは、争いが嫌い。

だから、ここに隠れ住んでいるの。最近、そのセンティールに有能なＥＳｐ所持者が取られたのは話したわよね？　あれはね……みんなね、強いから行ったのよ。私たちみたいな、低レベルのＥＳＰばかり持っている方には勝ち目がない、だから、みんなあっちへ行ってしまったわ……。

んん、さて、説明はこれぐらいにして、お茶でもしましょうか」

「ああ、そうだな……」

なんか、複雑なんだな。大人がいないのは、十年前の争いが原因ということか。

ずずずと、由利が入れてくれた紅茶を飲み干し、俺は、先程の話で気になったことを聞いてみた。

「その男っていうのは、見つかってないのか？」

「ええ、そいつはね、行方不明になってるのよ。ただでさえ少ない大人の中から探すのは簡単かもしれないと思うだろうけど、大人たちは全員隠れ住んでるのよ。見つけられるはずがないわ」

少ない、か……。元の世界では、多過ぎるほどいたのにな。この世界、いや、次元は、元の次元とはずいぶん、異なっているんだな。

元の次元に戻る方法は、やはり、あの鏡しかないな。

同じところにあるとは思えない、だから、ここで、生活しつつ、探すしかない、か。

「さて、そろそろ私は行くわね。あんたも、いつまでもそこに居ないで、ここの基地の見学にでもいきなさいね」
「ああ」

「ん。いつの間にか、寝てしまった……」
まだ眠い目をこすりつつ、俺は、医務室のドアを開け、外の出た。
「ん。やっぱ、ここ、なんか、足りない気がするんだよな」
なんだろう。なにか、重大なことがやはり、抜け落ちている気がする。……なんだ?

ドン

「ん?」

「あわわ、すいませんのだ。ちょっと、前が見えなくて」
こんな大きなダンボール箱あるんだな。前が見えないのは納得だ。
「手伝ってやるよ、ほら」
「あ」
重いな。こんなのを持ってたのか？　女子が……。この次元は男は女より弱いのかな？
「すいませんのだ。これから、武器庫で整備するのだ」
「へ～　君は整備士なのか？」
「当然」
やっぱ、胸がない人がやると、意味あるよな……。この子は、背が高いぶん、成長が早いんだな。

長い。なんて長いんだ。三十分かけてようやくたどり着いたぞ。なんて長いんだ……。

「ここですのだ。運んでくれてありがとでしたのだ」
「いや、別にいいさ。暇だったし。見学がてら来てみただけだし」
ここに来る途中、よく見てみたが、やっぱ、ここは、何かが抜け落ちている気がする。
それがなんだかわからないが、誰かに伝えておいたほうがいいのか……

「よいしょっと」

ガシャン！

！？　おいおい、あのダンボールの中身、全部銃かよ！　どうりで重いと思ったはずだ。
あれを、女の子が一人で持っていたのか……。つくづく思うよ。女はすごいと……

「よしよし、うふふ。可愛い、可愛いですのだ～　私の宝物♪」

やばい、この子。逝ってる。銃フェチだ。関わらないようにしよう。
うん、それがいい。
そーっと、武器庫から、出る俺は、さながら、スニーキングという技術を体感した気がした。

「ここ、どこだ？　あれ？」

武器庫から出たのはいいが、当てずっぽうで、部屋に戻ろうとしたのがだめだった。迷子になっちまった。

「ははは……」

もう、乾いた声しか出ない。ああ、全く、本当に、理不尽だ……

第三話、戦いの歴史（後書き）

申し訳ありません！　投稿がずいぶん遅れてしまいました！　読んでくれている方がいれば、家に侵入してでも謝りに行きたいです！

（オイ

次の投稿は早めにしますので、どうか、失望しないでください！

僕はだれ？　僕はなに？　僕は人間？　僕はなんなんだろう。人から並外れた力があるのはわかる。
でも、それがなんのために使うのかがわからない。どうすればいいんだろう。ねえ、マスター、僕は何をすればいいんだろう？　教えてよマスター。

第四話、絶賛迷子中

ああ、ダメだ、もう、ギブアップ。広すぎる……。広すぎるんだよこの基地。さっきから、歩き回っているが、広すぎてどこが、部屋なのかわからない。それに、なんだか、硝煙臭い。これが、銃を撃ったときにでる臭いか……。ああ、なんか本当にここは、次元が違うって痛感するよ、はは。
「ここは、たぶん、訓練場かな？　それらしいマークがあるし」
右に歩を進めてみると、前方に、騎士と騎士が戦っている絵が見え

た。おそらく、訓練場だろう……。行ってみるか。危険だと分かったはいるが、興味がないわけじゃない。むしろ、ある方だ。

そーっと行くか、そーっと。

バキュン！　キン、キン！　ガガガガガ！　バシ！　ベキッ！

うわぁ、金属音やら銃声やら、骨が折れたような音があちこちから聞こえる。どんなことやれば、骨が折れるんだか……。

「うし、全員集合！」

「「「了解！」」」

「ほら、そこに突っ立ってるお前。早くしろ」

「へ？　あ、はい！」

まずい、逆らったらなんかされる、逆らったら、殺される。それほどまでに、この額に十字傷、右目に眼帯、足には、昔戦争で使ったような服（たしか、モンペ、だったか？　中学の頃習ったからうろ覚えだ）頭にはシルクハットのような、長い帽子。、耳には、星形のイヤリング。

……なんか、可愛いな。本人の前で言ったら殺されそうだが、居ないところに入れれば、言っても問題あるまい。

「これから、お前らには、戦闘の基礎中の基礎。体術を教えてやろうと思う。ここにいるので、格闘技経験者はいるか？」

……え？　俺だけ？　なんで、みんな一歩下がって、俺に尊敬の眼差し送ってるの？

なに、俺に死ねというのか？　ああ、なんて人間は理不尽なんだろう、ははは。

「お前、名はなんという」
「不知火直也です」
「そうか、では、不知火。まず、私の初激を躱してみろ。はっ！」

一歩下がり、やや、上方向に来た蹴りを、躱す。そして、一発と言いながら、二発目が来たので、俺はそれは、バックステップで躱す。だが、なぜか、三発目が来たので、しゃがむことでそれを避ける。だが……。なんか知らないが、四発目五発目ときたので、慌てて、俺は、それを、両腕でガードする。

「っ」
「ほほー。よくガードしたな。まぁ、合格だ。さて、諸君。これから、二人一組となり、組手をやってもらう。頭、目への攻撃は禁止。急所や鳩尾への攻撃は、ありとする。では、始め！」

この鬼教官の説明を聞いた生徒？　たちは、慣れないのか、最初はゆっくりとやっていき、だんだん早くするという方法を取った。で、まだ腕が痛む俺はというと、この鬼教官に連れられ、訓練場の外へと出た。

「お前、私の生徒ではないな」
「はい」
「そりゃあ、あんな動きができるならもう、私の教えは必要ないだろうからな」
「ははは」

あんな動きって。俺、昔の感覚を少し取り戻しただけだぞ。そんなすごいわけないだろ。

「お前。迷っているな」
「何を言うんですか突然」
「いやな、お前の動きは確かによかった。だがな、どこか迷っている感じがしたんだ。お前。このままじゃ死ぬぞ。私の生徒はまだ争いには参加させてないが、お前なら十分争いに行く資格はある。だが、いつまでもその迷いがあると、いつか死ぬぞ」
「…………」
迷っている、か……。たしかに、俺はこの次元で暮らすことを迷っているし、自分の力も、どこか、迷いがある。争いだって、やりたくないし、拳銃だって握ってみたいとか握らないとか迷ってる。
「強制はしない、だが、頭の片隅のでもおいといてくれ。お前。私の生徒にならないか？」
「……考えておきます」
今、技術を磨いて、仲間を守るために、使うか。それとも、自分の身を守るために使うか。
どちらがいいが。俺は迷っている。また、仲間を失うのは嫌だ。……俺がやらなくても、誰かが守ってくれるんじゃないか、そう、思ったりもする。
「まぁ、考えておいてくれ。さて、私は生徒たちを見てくる。頑張れよ、不知火」
「はい」
あ、大事なこと聞くの忘れてた。ここどこなんだよ……。今から戻って聞いてもいいが、それだとなんか負けた気がする。

ふぅ、とりあえず、どこか休めるところへ……

第五話、サミエル

ああ、なんで、こんなとこに入っちまったんだろうか。ベンチを探していたはずなのに、いつの間にか、こんなところに……。ああ、理不尽だ、理不尽すぎる。

第五話　サミエル

あれ？　ここどこだっけ？　あれ？　右を行って、そのまま、進んだんだが、前方に見えるのは、行き止まりだ。戻ろう。それがいい。ベンチはこんなとこにない。うん、ない。よし、戻ろう。それがいい。

「うん？　なんだこれ？」

戻る途中、なにかのスイッチを見つけたので、人間の本能により、ポチっと押してみた。
すると、薄暗かった細い道は、明るく照らされて、何もなかったはずの、前方に、黒い球が降りてきた。

そこにも、スイッチがあったので、我慢しきれず、それを押してみると、なにか、パソコンがエラーを起こした時のような音をしたあと、跳ねた、いや、飛んだ。まるで鳥のように自由に空中で動き、しばらく、動き回ったあと、また下の位置に落ちてきた。

「????」

疑問を覚えることしかできない。この球は何がしたかったんだろうか。逆に考えると、これを作った人は何をしたかったんだろうか。

『エラー発生、エラー発生、この球はまもなく自爆します。周りにいる人は直ちに避難をしてください、ヒヒッ』

……自爆？　……えぇぇぇぇぇぇぇ！？　なぜ、なぜ！？　勝手に飛んで、勝手に落下しただけじゃんか！　それで、自爆って……おい。と、とにかく、やばい。ここから逃げないと。

『ヒヒッ。五秒前、四、三、0。ピーピーピー』

おおいっ！　数え方がおかしいだろ！　ちくしょおお、こんな球に殺されたくねぇぇぇぇぇ。

ドドドドドドドン、ババババババ

腕を前でクロスさせ、なんとか、耐えた俺は、腕がジンジン痛むのを我慢して、腕をどけた。

まだ煙が晴れない道で、しばらく待っていると、前方に、先程自爆したはずの球があった。

そして、また、勝手に飛んだ、球は、しばらく飛んだあと落下した。

『エラー発生、エラー発生、この球はまもなく自爆します。周りにいる人は直ちに避難をしてください、ヒヒッ』

おおおおおおいいいいいいいいいい！　ざけんな、ふざけるなぁあああああ

『0』

ドドドドドドドドン、ババババババババ！

ああ、俺、死ぬんだな。ちくしょう。こんなとこで死ぬなんて、理不尽だ。

「理不尽だぁあああああ」

「は！？　ん？　あれ？　ここどこだ？　というか、さっきの球な

に！？」
「にゃうにゃう。君はにょ〜　わたしが作った、爆竹にやられたんだにょ。まだ、試作品だったからにょ〜　済まないことした二ょ〜」
……で、なんで、あなたは、水着なんですか？　という、言葉を飲み込み、俺は、魔女みたいな帽子をかぶった、少女の頭に拳骨した。

「にょおおおお！？　痛かったにょ、なにするにょ！」
「これだけで済んだからいいだろ。で、ここどこだ？」
「んん、ここはにょ〜　わたしの、隠れ家だにょ」
「か、隠れ家？」
「うみゅ。ここは、センティールの隠れ家」
……はい？　今なんておっしゃいました？　センティールの隠れ家？　……やばいじゃん。俺、誰かに会ったら殺されるじゃん。で、そんなことはよく実現するもので、ランプやら、フラスコやらが、散乱している部屋の入口？　にあるドアが開いた。

「サミエル〜　いる〜？」
「いるにょ〜」
「入るね」
「あいあい」

え？　この人、俺をここに連れてきたくせに、俺を殺す気か！

「……あ」
「あ」
やばい、目があった。やばい、殺される。ちくしょう。こんなとこで死ぬのかよ。さっきも思ったが、この次元、死亡フラグ有りすぎ

じゃね？

「はじめまして。私、サミエルの姉の、ミハエルと申します。妹がお世話になったそうで。聞いてますよ、あなたは、偶然、地上で倒れていたそうで。サミエルが拾ってきたらしいですね」

は？　何言ってんのこの人。倒れてた？　……俺はアブダクトの基地でこいつの自爆球にやられたはずだぞ。断じて、地上に出ていない。……もしかして、この子、助けてくれたのか？

「（こしょこしょ。助ける代わりに、あとでお願いを聞いてくれによ」

「（ああ、分かった）」

言う事聞くしかないよな。でなけりゃ、殺される……。

「あれ？　あなた、どこかで見たような……気のせいかな」
「たぶん、気のせいだと思いますよ」
「そう、ですよね。これは失礼しました。では、サミエル。後で、ナイフを千本持ってきてくださいね」

聞き間違いだろうか、今千本って聞こえたんだが……それはないよな。多分百本だろう。
耳悪くなってきたなぁ。年かな。

「あいあい、千本で、１０万にょ～」
「ふふっ。よろしくね」

ははは。聞き間違いじゃなかった千本だってよ、千本、ははは。何

に使うんだよ。料理か？
サバイバルか？　……まぁ、戦いに使うんだろうが、あんまり考えたくないな。

「……さて、不知火直也。貴殿には、私から伝えたいことがある」
さっきまでのおちゃらけた感じじゃなくなった……こいつ、なにものだ？
「我々、センティールは、貴殿のアブダクトに近々宣戦布告をする」
「！？　……ま、まぁ、俺には関係ないけどな」
関係は、ある。俺はもうアブダクトの仲間のはずだ。言葉には出さないが、そうだろう。
俺は、どうすればいい。俺は、なにをすれば……。

「だがな……」
「？」

突然暗くなったサリエルは、来ている水着を突然脱ぎ始めた。……ん？　脱いだ？　……ぎゃああ。
何脱いでるんだよ！　一瞬ちらっと見えちまったじゃないか、白いあれが……。

「私はもう、長くない。だから、戦いには参加しない。だから、私は、ここで、鍛冶屋をやっている。そこで貴殿に頼みがある。私はもう長くない。だから、一週間でいい、私を楽しませてくれ」
「……それ受けないと、どうせ、センティールの奴らに殺されるんだろ？　なら、仕方ないうけるさ」
「！？　本当か？　本当なのか！？　わ、私を、楽しませてくれる

のか！　は、はは。嬉しい、私は嬉しい。こんな狭いところで隠れるのはもう終わり。やった、ついに、ついに。私は自由だ。やった、やったぞ。ははは」

……そんなに喜ぶことか？　ただ、一週間、楽しむだけだろ？　俺だったら、普通にするけどな。

「さぁ、出よう。ここからでよう！　こっちへ来てくれ、な、直也」

「ああ」

フラスコやらビーカーやらがある理科室みたいな部屋のコンセントのところをサミエルがこじ開けると、そこには、人一人が入れそうな穴がぽっかりと空いていた。

「さぁ、行こう」

「ああ」

「……ここは？」

「何を言っている？　アブダクトの基地だろう」

「へ？　でもこんな崩れそうな構造してなかったぞ」
「……まさか、直也は、ＥＳＰを使ってないのか？」
「へ？」
ＥＳＰを使うって言うということは、使えば何かが起こるということだろうな。でも、俺のＥＳＰは……。
「まさかとは思うが、ＥＳＰを持っていない？」
「い、いや、あるさ。ただ、使いたくないだけだ」
「……そうか、ならばいい」
使いたくないというのは本当だ。キスしてまで、使いたくないしな。ただ、ピンチのときは……使わないといけないだろうがな。

「あそこを見てみろ」
「ん～　なんか入口扉があるな」
「違う、その上だ」
「？　まさか、あの鳥？」
「そうだ」
青い鳥が、扉の上に、引っかかってる？　のかな。だが、あれがなんだと言うんだ。
「あれはな、アブダクトの一員が入ることができる入口だ。お前なら知っているだろう？」
「いや、知らない」
俺が皮肉気味に言うと、サミエルは、ぽかーんと口を開けた
「へ？　そ、そんなはずはない！　直也は、アブダクトだろう。知

らない訳がない」
「いや、本当に知らないんだ」
これは本当だ。俺は知らない。昨日一昨日アブダクトに入ったばかりなんだ。教えてもらえるわけがない。
「じゃ、じゃあ、どうするのだ！　私が自由でいられるのはアブダクトだけなんだぞっ！」
「待て、何かないか考えてみる」
由利の言動の中に、なにかヒントがあるはずだ。思い出せ、思い出すんだ。
『よーし、真琴、徹底的にボディタッチして』違うこれじゃない。
『あ、あ、あんた、正倉学院の生徒だったの？』　！？　これだ、正倉学院。これが多分キーワードだ。
「正倉学院と言ってみたらどうだ」
「なんだか知らないがやってみる」
サミエルは、青い鳥の前に立ち、何かを待っている。
「……アイコトバハ？」
「正倉学院」
「……トオレ」
ガシャン！
おお、重い扉が開いたぞ。やっぱ正倉学院だったのか。

「おお、よ、よし、行くぞ。直也」

「はいはい」

はいは一回！　と由利に言われそうな感じがするので、少し自重しつつ、俺はサミエルニついて行き、扉へと入っていった。

第六話、日常から争いへ

マスター。マスター。もう、我慢できないよ。早く、早く力を使ってよ。じゃないと、暴走しちゃうよ。いいの？　大切な仲間が死んじゃうんだよ。それでもいいなら僕は……。

第六話　日常から争いへ

「で、この子は誰？」

「え、えーと。サミエルと言って、俺が連れてきたんだ」

「ふーん。センティールじゃない確証は？」

「襲わないんだからそれが証拠だ」

今、俺は、不機嫌気味の由利の前に立っている。横には平然とした顔でいるサミエルが。

サミエルは、由利のことが、嫌いなようだ。だって、由利を睨んでいるのだからな。

……俺、何かしましたか？　ただ、こいつの、言うことを聞いて、付いてきただけですけど、なにかまずかったですか？　由利さん。そんな目で俺を見ないでぇ。

「まぁ、いいわ。で、直也。なんで、居なくなったのかしら？　理由次第では殺すわよ」

ひぃ。それで怒っていましたか由利さん。勝手に居なくなったのは悪かったけど、その、人を殺せるような目で見ないでくれ。

「じ、実は、まいｇ「実はにょー。私が、地上で迷子になってるとき、助けてくれたんだにょ」へ？　あ、ああ、そうそう。こいつを助けたんだった、あはは」

「…………」

い、いや～　目がさらに鋭くなった気がするのは俺だけですか～？

ああ、冷や汗がだらだらと流れていく。額から垂れた汗は、俺の靴にあたり、水が弾けるような小さな音を発したあと、靴に染み込んでしまった。み、見られてないよな？　見られたら終わるぞ。俺の人生が。

「ふーん。でも会ってまもないはずなのに、ずいぶんと仲がよろしいことで」

「へ？」

いや、なにも仲がいいってことは……え？　なんか、サミエルに服つかまれてるんだけど。

なぜ？　ｗｈｙ？

「まぁ、いいわ。直也とサミエルちゃん。こっちへ来て頂戴」

「あ、ああ」

「了解にょ～」

由利の部屋だろうか。どことなく、甘い香りがする。ベットはシンプルな白で、家具は、タンスから、冷蔵庫、さらに、電子レンジまである。そんなとこに入った俺は、猫をかぶっているサミエルに、由利が後ろをむいているすきに、聞いてみた。

「（なぁ、なんで、俺と話す時みたいに、普通の喋りかたしないんだ？）」
「（この喋り方のほうがな、怪しまれないんだ）」

そんなもんなのかな。

「さて、直也。あんたに渡しておきたいものがあるんだけど」
「？　分かった」

俺が返事をすると、由利は、部屋の奥のふすまを開けて、なかから、箱みたいなモノを取り出して、俺に投げた。
なんとか、キャッチした俺は、由利が目で開けなさいと言っているのを感じたあと、箱を開けた。

「これは？」
「最新式の電動ナイフとワルサーＰ３８よ。電動ナイフは、もつところにある、小さなボタンを押すと、歯が振動して、切れ味がますわ。ワルサーＰ３８は９ｍｍ×１９パラベラム弾を使うから、箱に入っている銃弾を使いなさい。で、あともうひとつあるんだけど、これは、ピンチの時使いなさい、仮死薬だから。敵の捕虜になったときとか、それを飲むのよ。おｋ？」
「ああ」

なんか、本格的に俺の次元とは違うな。電動ナイフとか、ありえんだろ。人を殺すためにあるような武器じゃないか。それに、拳銃の名前覚えられない。ワルサーまでは覚えたが、そのあとはあんまり……。

「で、その子なんだけど。アブダクトに入るの？」

「え」
「はいるにょ〜」
ええ！？　入るのか？　サミエルはセンティールだろ？　それって、裏切り行為なんじゃ……。
裏切り者は殺すのみ、とか、よく小説とかで読むが、実際はどうなんだろうか……。
「じゃあ、直也とサミエル。付いてきて。この基地を案内するから」
「え！？」
「あいあい」
俺が迷子までして、回った基地を案内する？　……じゃあ、俺が迷子したのはなんだったんだ……。
まさか、無駄だった……。
「はい、ここが私たちが住む区間、アリエション。で、向こうに見

える扉の奥が、食料庫。
その隣にあるのが、武器庫。あとは、部屋とかトイレとか、いろいろあるけど、それぐらいかな。
で、ここは三階で、下に二階、一階、地下一階とあるわ。それは、後々教えるわ」
「まぁ、だいたいわかったからいいか」
「だにょ〜」

もしかして、訓練場がないということは、俺は、二階か三階に行っていたということに……。
そういえば、階段があって、それを下ったような気がする。疑問だけど、エレベーターとかないのかな?

「さぁ、戻りましょうか」
「ああ」
「あいあい」

で、戻ったはいいが、やることがない。暇だ。サミエルは、外の猫に興味津々だし、由利は、部屋で、武器の整備してるし。……また、元の次元と同じようになってきたな……。

「…………」

昔は、家族でワイワイと、意味もない事で笑っていた気がする。もう、10年も前のことだからうろ覚えだ。……俺が三才のときに病気で死んだ、父。　五才のとき、強盗に殺された母。七才の時交通事故で死んだ妹。みんな、俺を大事にしてくれた。でも、俺は恩を返せなかった。って、なに考えてるんだ俺。　ははは……

コンコン

ん？　誰か来たのか？　由利では、ないな。あいつはノックしないで入ってくるし、サミエルは、ノックしないで声だけ掛けて入るだろうし（たぶんだけど）誰だ？

「開いてるよ」
「しっつれいしま〜す」

この声は、聞いたことがある、俺がここに落ちてきたとき、由利たちと共にいた、小さい子だ。

「こんにっちは〜」
「あ、ああ。こんにちは」
「私の名前は、水瀬彩って言いますよろしく♪」
「ああ、よろしく」

なんか、バニラの香りがする。香水か？

「実はね、なおなおに話があるの」

な、なおなお？　ああ、直也のなおからとったのか……呼ばれたこと無いな、そんなニックネームで。呼ばれたことがあるのは、なおやんとかだが、なおなおは呼ばれたこと無いな。
第一、ニックネームを付けるやつななんて、小学校のときしかいなかった。まさか、高校生にもなって、ニックネーム付けられるなんて……。

「なんだ？」
「実はね、私、キスしたことないの」
「……はい？」

なに言ってんのこの子。そりゃあ、俺だってキスしたことない……
いや、あるか。だが、あれは……。

「でね、その、キスしてみたいんだけど」
「勝手にやればいいじゃないか」
「いいの？　やっていいの？」

キスの相談か、俺には無縁の相談だな。

「じゃあ、いっきま〜す」
「ああ……って、んん！？」

な、なんで俺にするんだよ！　誰か好きな人にやれよ！　く、くそ。

ドクン、ドクン

始まった。マインドエナジーが始まった。始まってしまった……。

ドクン、ドクン

体が熱い。体の底から暖かくなってくる。二回目だが、気持ちいい。

ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン！

「……で、君はなぜ、俺にキスしたのかな？」
「え〜　だって〜　ゆりゆりとしたんでしょ？　それなら、私もしないとって思って」
「ふーん、それで、君は、キスしてなにかあったか？」
「え？　な、何もないけど……」

やっぱり、この子。キス初めてじゃないな。何人もの男とキスをしている。

「……俺がどうのこうの言う筋合いはないが、あまり、自分を粗末にするのはやめたほうがいぃ」

「え？　な、何言ってるの？　私は、自分を大切にしてるよ」

嘘だな。目をそらしている。耳がぴくぴくしているし、今の俺なら、他人のことが少しわかる。

「まぁ、それはおいといて。君はなにものだ？」

「！？　……気づいたか。さすがはマインドエナジー保持者。侮れない」

彩は、ふざけた感じだった表情を、きつくさせ、髪を解き、自分の目に手を当てた。

すると、コンタクトだったのか、薄い膜が手にくっつき、それをポケットにしまった。

俺が気づいたわけは、彩が、先程から殺気を隠しきれてないからだ。キスの時は和らいだが、今はビンビン感じる。

「そうだ、私はセンティールの一員。綾女彩とは私だ」

綾女彩。今の俺ならわかる、こいつは、センティールの一員にして、二番目に強い。

会ったら確実に殺される。そう呼ばれているセンティールの強者。他人の能力を奪うことから、二つ名をつけられた。ＥＳＰキラーと。

「貴様の能力はもう盗んだ。我々の兵器を壊した張本人の力さえ奪

えれば、アブダクトなど、弱者に過ぎない。フフッ。我々は今日、お前たちに宣戦布告をする。裏切り者を抹殺するのと同時に、お前たちを殺す」
「……裏切り者てゃ、サミエルのことか？」
「そうだ。あいつは我々を裏切っただから殺す」
「……そうか。それなら、君を逃がすわけにはいかないな」
「やるか？」
「ああ」

こいつは強い。俺のＥＳＰを奪ったから、さらに強くなっているはずだ。だが、負けるわけにはいかない。
「だが、今日はここまでだ。エンペラーが呼んでいる」
……エンペラー。皇帝、か。センティールのトップに君臨する男。すべてのＥＳＰを無力化することから、皇帝の二つ名が付いた。
「さて、ではさらばだ」
「……次は逃がさない」
誰かのＥＳＰだろうか。姿が消えた。おそらくテレポートか何かだろう。厄介だな。綾女彩……

第六話、日常から争いへ（後書き）

感想お待ちしていまーす

第七話、一時の静寂

眠ぃ、眠すぎる。なんでこんなに眠ぃんだ。あのあと、いろいろ考えていて、いつの間にか眠ってしまったらしい。起きようとしても、目が開けられない。眠すぎて目が開けられないんだ。

マインドエナジーはもう切れているが、結構頭が回る。眠いのにな。

ああ、このまま一日眠っていたい。

第七話、一時の静寂

「お……ろ……お……ろ……。起きろ！」

「うわぁああ」

「やっと起きたか。さぁ、直也行くぞ」

「んん？　行くってどこに？」

まだ、眠いんだ。少し休ませてくれよ。……ああ、手をつながれて、ドアを開けて、外に出されてしまった。くぅ、眠いのに、眠いのに！

「まずは、武器庫にいこう。ここの職人が気になる」

「あーー」

「ぼーっとするな。行くぞ」

あー、また手をつながれて引っ張られるー。女の子と手をつなぐのはあんまりしたことがないんだが、そこんところ、どうなんですか？　サミエルさん。

「どんな職人がいるのか、楽しみだ～♪」

「はぁ」

そういえば、サミエルも職人だったな。今思い出した。ここの職人といえば、あの喋り方が特徴のあの子じゃないのかな。ん～　でも、他にもいそうだな。あ、そうか、大人はいないんだっけ。元の次元の職人といえば、大人だったからな。この次元とごっちゃになる。

十分かけてたどり着いたんだが、肝心の職人が居なかった。不機嫌になったサミエルをなだめつつ、俺は、辺りを見渡した。周りに人はいない……だが、なんか大きな布がかぶせられた物体を発見した。怪しい。実に怪しい。なにか、爆発物でも入っているんだろうか。気になる……

サミエルも同じなようで、布がかぶせられた物体を見ている。

「なぁ、あれって」
「ロボットか？　ロボットなのかっ！」
「お、落ち着け。お前がロボット好きなのはわかるから、近づくな。危ないだろ」

こいつ、そういえば、変な球の製作者だったよな……うう、思い出しただけで鬱になりそうだ。

「えいっ！」
「おい……あー、知らないぞ」

ぺろりとぺくれた布を横目に、かぶせられていた物体を見る。……あれは、機関銃？　映画とかで見たことあるが、あんなにでかかったか？　……それに、なぜ、こんな通路に機関銃？
疑問は出てくるばかりだが、目をキラキラさせて、機関銃に近づくサミエルを抑えなくてはいけない。

「おお、す、すごい、すごいぞ、直也」
「間違って撃つなよ？　いいな」
おい、返事をしろ。ああ！　こいつ、やりやがった。

チュンッ！

「へ？」

なんだろう。目の錯覚かな。俺の顔を掠めたような気が……げっ、この赤い血は！？　や、やばい。

いまの少し横に動いてなかったら目玉に直撃してた。……このやろぉ。

「サミエルっ！」
「お、おおお。直也、すごいすごいぞ。動く！」
「わかった。わかったから銃口をこっちに向けるな」
「あ」
「あ、じゃねぇええええええ」

ダダダダダダダダダダ。チンッチンッチンッ！　キンッ！　チッ！

う、うわぁああああああ。に、逃げろ、逃げろぉおおお。

チッ

おいおいおいおいっ！　また掠ったぞ。や、やばい。本格的にやばい。

「な、直也。こ、これどうすればいいんだ！」
「知るか！　早く止めろォオオ」

結局、銃弾がなくなるまで続いた銃弾の雨は、辺りを破壊した。

「は、ははは」

もう笑うことしかできない。俺の衣服はぼろぼろ。対して、サミエルは無傷。笑うしかない。

しかし、なぜ、こんなにもでかい騒音をまき散らしらしていたのに誰も来ないのか、疑問だ。

もしかして、この武器庫前、防音でもしているのか？　……いや、それはないな、壁がないし、ガラスもない、響くはずだ。なのにどうして……。

「さ、さあ、たのしんだところで、次へ行こう。さぁ、さぁ」

「あ、ああ、分かった」

疑問は残るばかりだけど、いまはこいつに付いていくしかないか。

「おろ？　私の機関銃が、使われたのだ？　……まぁ、いいのだ～実験段階だったから、きちんと働いたので良かったのだ」

いま、後ろから何か聞こえた気がするが、気のせいだろうか。

「おお、ここがアブダクトの訓練場か！　センティールに比べて貧相なんだな」
それを聞いたら由利が激怒するが、まぁ、居ないからいいだろう。
さて、ここに来るのは二回目だが、なぜか人がいないな。気配もしない。

「なんで人がいないんだ？」
「私に聞いてもわからない」
どこかに行ってるのかもしれないな。いまは気にしないでいいか。
「やることもないし、帰るか？」
とサミエルに聞くと、どこか寂しそうだった目を閉じ、「ああ」と答えた。

次に向かう目的地は、いまいる階にある、調理室だ。すこし遠くにあるが、べつに、歩けばいいことだと、自分に言い聞かせつつ、サミエルとともに歩きだした。

やはり、甘い臭いや、辛そうな臭い、そんな臭いが俺の鼻をくすぐる。ん～　美味しそうな臭いだ。
これは、肉を焼いている音だろうか、なんとも言えない音が鳴って、

俺を奮い立たせた。
我慢できない俺は、サミエルが中に入っていくのを見て、ついて行った。

ジュージュー、シャアシャア、ジュウウウウウ。

「お、おい、直也。こ、これ食べてもいいのか？」
「ん？　なにを……って、だめだめだめ！　絶対ダメ！　こんな高そうなもの食うな！」
「ちっ」

ちっ、てお前……まぁ、それはいいとして……なんで、鮫が丸ごと？　そもそも鮫って食えたか？
マグロとかいかとかタコぐらいしか、食べたことないが、鮫はないだろう。……あ、フカヒレにして食うのか。それなら納得だ。
考えを完了したあと、サミエルが居ないことに気づいた俺は、料理長？　に睨まれながらも、調理室を捜索した、んだが、なにせ広い基地だ。調理室も広かった。有り余るほどにあるスペース。
ありえないほどにあるベッド。そしてなにより、ありえないほどでかいオブジェ。……まったく、俺がいた次元にはこんな豪華なとこ、金持ちぐらいしかないってのに。

「お、いたいた。こんな端っこでなにを……う、嘘だろ。お、お前何食ってんだ！」
「ん？　ひょれはなしょれすといっひぇな、ひょこにおいひぇあっだ」

？？？？　何言ってんのか訳が分からん。……うまそうだなそれ。
キャビアって言うんだっけか。
サミエルのやつ、口にいっぱい入れやがって。あ、落ちた。もった

いない。

「んく。ふぅ、うまかった。実に美味だった。ん？　直也、どうした？」

「いや、それさ、何万円するのかと思って」

「まぁ、気にするな」

「それでいいのかなぁ」

このあと、料理長に見つかった俺は（サミエルはいつの間にか消えていた）こっぴどく叱られることになった。

「サミエルー。どこだ？」

ヒヨコ

ん？　いまなにか目の前の岩から出たような……気のせいか

ヒヨコ

……間違いない。あれはサミエルだ。あの白い肌と独特の服を持ってるのはサミエルしかない。
あの服。たしか、アンティークの服らしい。どうも、姉のミハエルはアンティークマニアらしい。
それで、何をどう間違えたのか、影響されて、サミエルもアンティークマニアになった、ということらしい。全体の色は黒だが、ところどころに斑点模様がある。ゴスロリ（あの彩というやつが着ていたやつだ）みたいにふりふりしているが、そのふりふりのところにはリボンのような紐のような、フリルがついており、それが三段になっている。どうも、女王をイメージした服らしい。

ヒヨコ

「捕まえた」
「くぅ、捕まった。じゃあ、次は直也が隠れる番だな！」
「はい？」

なにこいつ、もしかしてかくれんぼしてたの？　ｗｈｙ？

「いーち、にーい、さーん」
「はぁ、やるしかないのか」

こうなったら絶対捕まらない隠れ方をしてやる。見てろよサミエル。

第七話、一時の静寂（後書き）

はい、こんにちは（こんばんは）ユウジです。いや～　最近は気温が上がったり下がったりと大変ですね。皆さん、風邪には十分に気を付けてくださいね。

第八話、対立

バババババババ！
「早く、早く行きなさい。ここは私たちで食い止めるから！」
「あ、ああ。死ぬなよ、絶対」
「もちろんよ」

ババババババババ！

「サミエル……いま助ける。待ってろ」

ジジジジジジ

「っ！？　これは、砂鉄？　なんで砂鉄がこんなところに」
「フフフ。来たのね、不知火直也」
「！？　お前は……砂塵の陽炎、真瀬優香……ちっ、嫌な奴にあたっちまった。こんなところで、時間食ってる暇はないってのに」
いま振り返ってみれば、あの時、俺が隠れることなどしなければ、サミエルは、連れ去られなかった。くそ、理不尽だ。なんて理不尽なんだ。この砂鉄女は、いまの俺じゃ倒せない。
ここで、くたばるか、逃げるか、選ばないと……。
「フフ、逃げようとしても無駄。私の砂鉄からは逃げられないわよ」
「ちっ、どうしたら、どうしたらいいんだ……」

第八話、対立

サミエルの数字を数える声が聞こえなくなるほど下の階に行った俺は、絶対に見つからないところに、隠れるため、辺りを見渡した。
後ろには階段があり、ここの近くは見つかる。
ならば、もう少し奥に行こう。
誰もいないところまで、来ると、さすがにここはやばいんじゃないかと思い、戻ろうとした。
だが、唐突に開いていたドアが閉まった。

「は？」

きょとんとした表情で、ドアを見つめる。なんの変哲もないドア。だが、明らかに違うところがあった。ドアノブが無い。疑問に思った俺は、ドアノブがあったところに手をかざしてみた。
無い。あったはずのドアノブがなくなっている。ありえない。俺が目を離した好きに消えているなんて。だが、事実なので、諦めるように、近くにあった樽に座る。
はぁ。どうしようかな。ここで、誰かがくるのを待つか、なんかの方法で、ここを脱出するか。
……やっぱ、後者だな、待ってられるほど出来ちゃ人間じゃないし

な。
「なんかないかな」
当たりを見渡してみると、あるのは、樽、樽、樽、箱、箱、箱。それしかなかった。
「はぁ。これでなにしろって言うんだよ全く」
樽じゃあ、ドアをこじ開けられないし（ここのドアは俺の家と違って、木でできていないため、破れない）箱は、なんの役にも立たないし。……まさか、ここで餓死しろと？
サミエルに期待はできない。あいつはたぶん、まだ三階で探してるはずだ。この一階には、あまり人がいないと由利が言ってたしな。
……さて、どうする俺。こんなとこで、餓死なんてしたら終わりだぞ。
ドガガガガガガ！！
！？　なんだ、外から聞こえた。それも爆弾で爆破したかのような音だ。まさか、センティール……。これは本格的にやばい。はやく、ドアを開けないと。
チャキ
ん？　……あ、電動ナイフがあったのか。いけるか？　まだ使ったことがないが、まぁ、いけるだろう。
スイッチを押したとたん、俺の腕にやばいほど衝撃が走った。っ、な、なんだよこれ、反動がやばすぎるだろ。ちっ。だが、そんなこと気にしてる暇はない。
ジジジジジジジジ、ガガガガガガガガ、バコン！

す、すごい、ナイフで鉄をこじ開けたぞ。さすが、電動ナイフ。俺のいた次元にはあるかわからない、武器だ。さて、音がしたのは上だったな。待ってろみんな。

「はぁあ！」

チンっ！

「おやおや、戦うのですか？　私はあまり戦いたくないのですがね」
「うるせぇ。じゃあ、なんで攻めてきたんだ。この伊達眼鏡やろう」
「ん～　そうですね、皇帝が命令したんで仕方なく、といった所でしょうか」
「皇帝、ねぇ。どんな奴かはしらないが、弱いことには変わりないんだろうな」

ピシッ

「いま、なんて言いましたか？　ハルバード使いさん」

「あ？　弱いって言ったんdなよ、カス野郎」

ピシッ

「いいでしょう。戦いたくなかったのですが仕方ありません。殺りましょう」

「は、やっとやる気になったか」

ん～、影でこそこそ見てるのはやっぱ、犯罪に……ならないか。それにしても、あいつは、たしか、真琴だったか、その手にもっている大きなハルバードが獲物らしいな。その相手は、伊達眼鏡に白衣、手にはカルテ？　を持っている、まぁ、なんだ、医者だ。ふざけてるとしかいようにない、敵。

だが、強さがわからない今、無闇に一体一で戦うのは危険な気がする。俺も出るか……いや、あの赤ロンゲ（真琴のこと）のことだ、邪魔すんな！　って、俺に向かって攻撃しそうだ。

ここは、任せて、進むか。

「おい、てめえ。そこで何してやがる」

ギクッ。み、見つかった。それも敵意剥き出しな目で！

「いや、なんだ。たまたまここを通りかかったら君らがいたんだ」

「そうか……なら行け」

ふぅ。馬鹿でよかった～　もし由利だったら、なにかをグチグチ言

われて、挙句に、何かされるんだろうな。うー、怖い怖い。さて、あいつらのところを通りすぎたのはいいが、すぐにまた、人がいた。あれは、確か、俺が落ちたときにいた一人の、忍者っぽい人だ。……ありゃりゃ、無双してるよ。どんだけ修行したらああなるんだか。さて、ここは、無視して、先にすすもう。

おいおい、なんか、進んだのはいいが、迷っちまった。はぁ。つくづく俺の方向音痴には頭を悩ませるよ。

「地図がどこかにあるはず……ないか」

あるわけないか、ここのやつらは、みんな道がわかるんだろうからな……

「え？　直也、ここでなにしてるのよ」
「ん？」

突然かかった声に後ろを振り返ると、そこには、狼みたいた形相で俺のことを睨む由利がいた。
なんか、バッタリと会ったな。ここは、挨拶でもしとくか。

「おはよ「危ない！へ？」

シュン！

うぉお。本当に危ない。由利が手を引いてくれなかったら、今頃脳天から血をたらたらと出していたことだろう。誰だよまったく。
「クスッ。また会ったね、なおなお」
「お前は！　綾女彩！」

「え？　どこからどうみても、水瀬彩じゃない。何言ってるの直也」
しまった。こいつ、知らないんだった。まずいな。あいつは俺の力を手にしている。そうやすやすと戦って勝てる相手じゃない。
「さて、二人とも。ここで私におとなしく殺されるんだね、バイバーイ」
カチ
彩が俺たちの目の前に放り投げた物体。それは、映画などでよく、みるＣ４爆弾だった。それも、次元式ではなく、即効性の……。
「っ！、由利危ない！」
「え？」
ドン
キュイイイイイインドガガガガガガガ！
っ！？　体が焼けるように痛い。服が消し飛んだ。うん、痛い……いってぇえええええええ。
なんだよこの痛さ。尋常じゃないぞ。過去にこれほど痛かったのは、間違えて、ホッチキスの針を指に指したぐらいだが、あれよりももっと痛い。由利は……よかった無事だ。庇った甲斐があった。
「な、直也！　あんたいま私を庇って」
「大丈夫だ。それよりも、あいつをどうにかしないとやばいぞ。」
あいつはセンティールのナンバー2。ＥＳＰキラーの綾女彩だ。あいつは何十ものＥＳＰを持ってる。正直俺たちで勝てるかはわから

ない。だが、負けるわけにはいかないない。行けるか？」
「え、ええ。いけるけど、あの子本当に裏切ったの？」
「というか、最初から仲間じゃなかったんだよ」
「そんな……」

人は裏切るということを躊躇なくする生き物だ。俺の周りでも裏切るやつは多かった。それはこの次元でも変わらないはずだ。

「くすっ。話はもう終わり？　あやや行っちゃうよ？　いいのかな、いいんだね。じゃあ、いっきまーす」
「な！？　目の前に。っ、ごふ」

な、んだ。この威力は。金属バッドで思い切り叩かれたかのように痛い。これもＥＳＰの一種か。

「直也！」
「次はゆりゆり～」

シュン！

「がはっ」
「直也、どうして庇うのよ、これぐらい自分でできるのに……」

なんか、体が勝手に動くんだよな。なんか、由利を見ると体が熱くなるというか、なんというか。
まぁ、とりあえず。……いってぇえええええ。ほんとに痛い。この痛みを分かる人はいるのだろうか。

「くすっ。なおなおはゆりゆりにぞっこんだねぇ。でも、そんな二人を壊したい。くすっ」

シュン！

ちっ、また来た。だけど。もう見切った。彩が攻撃を繰り出すときは、少し体がぶれる。その瞬間を狙えば。行ける。

コンマ一秒にも満たない時間。だが、俺と彩の間では長く感じられた。

「ふっ」

「はっ」

互いに右のブローを放つ。しかし、スピードで負けている俺はそれを腹にもろに受けてしまう。

「がはっ」

っ。やっぱダメか。今の俺じゃ無理だ。

「くすっ。早くさ、やりなよぉ。じゃないと楽しくないよ～」

やるってお前。ゲームじゃないんだし、そうそう、出来るかよ。由利はきょとんとしてるし。

「ん～　そうだね～　やらないんなら私がやってあげるよぉ～」

「なにwん！？」

こいつ。俺にキスしやがった。それも、舌までいれて。

ドクン、ドクン

不本意だが、発動した。たぶん、向こうも発動している頃だろう。

ドクン、ドクン

やっぱいつなっても気持ちがいい。いまこんなコト考えてる暇はないが、そう思ってしまう」。

「な、直也、彩。な、なにしてるのよ！　き、キスなんかして……」
「それは置いといて。由利。行くぞ。あいつを倒すんだ」
「え、ええ。わかったわ」

それからというもの。俺は前衛で彩の注意を引き、由利が拳銃で撃つ。それの方程式が成り立っていた。だが、マインドエナジーを発動している彩には、銃弾なんか、ほこりみたいなようで、持っている拳銃で銃弾を弾き返していた。俺との戦闘はやはり、あちらに部があった。体格差では勝っているが、戦闘技術の違いというんだろう。いくら少し武術をかじっていても、勝てないものは勝てない。

「くすっ。まだまだだね。なおなお。ゆりゆりもね。う～んゆりゆりは少し邪魔かな。えい」

ダンッ！

「由利！　よけろ！」
「いいの？　よそ見して」
「がはっ。くっ」

由利は、由利はどうなった。あの速さの銃弾をかわせる訳がない。どうなった。

「え？　え？　利那……助かったわ。ありがとう」
「いや、礼はあとでいい。今は敵を倒せなければならん」

ふぅ。なんとか大丈夫みたいだな。

「なんか、むかつく。ここは悲しいお知らせでも知らせておこうかな」
「？」
「じっつはね。サミエルっていう子が、私たちに連れ去られたのね。くすっ。いいよぉ。その表情。いいよぉ」

サミエルが連れ去られた、だと。くそっ。はやく、連れ戻さないと殺される。

ババババババ！

由利がいつも持っていえるガバメントで、彩を威嚇する。

「早く、早く行きなさい。ここは私たちで食い止めるから！」
「あ、ああ。死ぬなよ、絶対」
「もちろんよ」

ババババババババ！

「サミエル……いま助ける。待ってろ」

……勝てるかわからない。けれど、勝たなければならない。勝って

早く、サミエルを助けないと。

第八話、対立（後書き）

いや～　作者は最近本を読むということにはまりました。本ていいですよね。

なんかこう、想像しながら読めるというか。

さてさて、この作品ももう少しで１０話です、まだまだ、未熟ですがなにとぞよろしくお願いします。感想もどしどし待っています。

では、また会いましょう。

第九話、マインドエナジーVS砂塵の陽炎&鬼ごっこ

ダダダダダダ！　俺のワルサーから銃弾が飛び出し、真瀬の目前に迫る。だが、それを、砂鉄の盾でガードした真瀬は、そのまま、俺に突っ込んでくる。おそらく何かしらの策があるはずだ。でなけりゃ、突っ込んでくる訳がない。策に乗らないよう、距離を取りながら、ワルサーから銃弾を放つ。

しかし、すべて、砂鉄の当たって威力を落とし、下に落ちていく。

「フフフ。ねぇ、このままだと、大事なサミエルちゃんが殺されちゃうよ？　はやく私を倒さなくていいの？」

「…………」

だめだ、話をまともに聞いてはいけない。こいつは、いや、女は魔性だ。すぐに男を騙す。例外もいるがこいつはまさにそうだ。その笑みがそれを物語っている。

「返答はなし？　釣れない男ね」

ダダダダダ！　無言で放った銃弾は、やはりというか、砂鉄に阻まれる。

「フフ。無駄。銃弾は効かないわよ」

分かっているさ。だが、油断してると隙ができるぞ？

ババババババ！

銃弾がなくなった。ポケットから新しいマガジンを取り出す。だが、隙ができる。それを見逃すほど相手は馬鹿じゃない。なので、電動ナイフを左手にもち、右手だけでマガジンを取り替える。

その秒数約２秒。世間にとっては短いだろうが、俺にとっては長い。二秒あれば、あいつは、砂とかで、俺を攻撃できる。

まったくそのとおりになった。真瀬から放たれた粒がでかい砂は、俺に向かって波のように襲ってくる。避けられないと悟った俺は、迫り来る砂を迎え撃った。

「フフフ。もろに受けたわね。いまの砂は、電撃の砂。当たれば、あたったところからじわじわと痺れてくるわよ？」

ふ、甘いな。砂を食らわなければいいんだろ？　なら、話は早い。砂に穴を開ければいいだけの話だ。俺は右手に持つワルサーを弾丸がなくなるまで、撃ちまくる。それに添えて、電動ナイフのスイッチをいれ、それを高速で、砂に向かって切りつける。するとどうだろう。前方に人一人が入れそうな穴がぽっかりとあいた。

「な！？」

砂が晴れると目の前には真瀬がいた。おそらく倒れている俺に止めでもさしにきたんだろう。

だが、生憎俺は無傷だ。油断しているこいつを攻撃することができる。

シュッ！　バジイィイイイイ

「きゃあああああ」

電動ナイフを逆手にもち、歯がついていない方で、真瀬の腹に命中させる。（二時間前気づいたが、この電動ナイフ、スタンガンの役目もある）

バタリと倒れた真瀬を俺は受け止めて、どこか安全なところに置いておく。（あとで暴れられると困るので、ロープで縛っておくのを忘れずに）

さて、ずいぶん時間がかかってしまった。早くしないとサミエルが危ない。

第九話、マインドエナジーVS砂塵の陽炎&鬼ごっこ

ダダダダダダダダ！　ババババババ！

俺が基地内の最上階へいそいでいる間、何度も銃弾を耳にした。おそらく、他のセンティールの奴らとアブダクトの連中らが戦っているんだろう。助けたい気持ちもあったがいまは、目的が違う。やるせないが、ここは、進まないといけない。

階段を上る上る。もう切れているマインドエナジーのせいで、俺は息が切れ切れだ。呼吸をするたびに血の味がする。だが、耐えなくてはいけない。耐えて早くあいつを助けないと。ただ、それだけが俺の原動力となっていた。

最後の階段を登りきり、俺は三階へとたどり着いた。そこには、誰もいなかった。いや、居なかったんではない消されたんだ。その証拠に服やら拳銃やらがあちこちに落ちていた。

さっきなったマインドエナジーのおかげで少しだけわかる。こんなことができるのは、センティールのナンバー3。消滅の殺戮者、来蔭夜鳩だけだ。たぶん、いや、確実にいま戦ったら殺される。なんとか会わないように気を付けないと。

「あれ？　さっきここらへんの人たちは僕が消したんだけど。まだ生き残りがいたんだ」

やばい。見つかった。運が悪いなちきしょう。見た目は普通の子供なんだけど。そのオーラが違う。こいつは強者だ。俺でもわかる。

「あれ？　君見たことがあるような気がする。なんだっけなぁ。う〜ん覚えていないということはそんなに大事なことじゃないのかな。さてさて、死ぬ準備は出来た？　いくよ？」

シュンッ！

「うわ！？」

あ、あぶねぇ。いま後ろに飛んでなかったら、消されてた。俺がいたとこはすでに、何もない。ただ、穴があいただけだ。……やっぱ

い。次は無理だ。よけれない。

「うん、いいね。今の動きはいいよ。僕の攻撃を受けて避けれたのは、君と、エンペラーだけだよ。

あ、彩もそうか」

なんか、よくしゃべるやつだな。まぁ、注意が削がれてるからいいんだが。いつまで続くか……。

「あ、今君逃げようとしたね？　逃げるなら容赦なく殺すよ？　いいの？」

逃げようとしていた足を止める。こいつ、いま本気だった。確実に殺そうとしてた。あのまま、逃げてたら殺されてたな、はは。

「じゃあ、どうしたらいいんだ」

「ん～　そうだね～　僕とゲームしない？」

「内容にもよる」

「ルールは簡単。僕が鬼をやるから、君は捕まらないように逃げればいい。もちろんESPはあり。

体の一部が消えても文句なし。もし十分逃げれたら見逃してあげるよ。じゃあ、数えるよ？

三十秒後に行くからね」

いーち、にーい、さーんと、あいつの死のカウントダウンが始まる。できるだけ、見つからない所にいかないと。幸いあいつは、場所を指定しなかった。なので、俺は裏をかいて、この階に隠れることに決めた。ここ、アリエションには豊富な隠れ家がある。あいつは鬼ごっこのつもりのようだが、俺は隠れる。もう声が聞こえなくなるほどアリエションの奥の奥に隠れると、ここでも聞こえるほど大き

な声が聞こえた。
「いくよー！」
始まったとたん、心臓がばくばく鳴り出した。抑えろ自分と言い聞かせながら、心臓の音を弱めたあと、物音をたてないよう、うずくまった。
ああ、なんで、こんな目に合っちまったんだろう。もとの次元は平和だったのに。なんで、俺がこんなことしなけりゃいかないんだ。まったく、理不尽だ。
頭の中がそんなことで埋めつくされる。幸い、思うだけで口にはしなかった。こんな状況じゃなければ、口に出してたかもしれないが、状況が状況だ。はぁ。まったく。もし元の次元に戻れたら、鏡は使わないようにしよう。と、そんなことを思っていた時だった。近くから、変な音が聞こえた。
シュン！と。何事かと思ったが、すぐに結論に至った。あいつは、近くの建物を消したんだ、と。
やばい。ここも消される。そう思った矢先、俺がいたところの右半分が消えた。幸い左に移動していたために、当たらなかったが、あたっていたらと思うと、体中が震えてきた。
「あー、いたいた。ダメだよ隠れちゃ。これは鬼ごっこなんだから」
「ちっ」
攻撃が来る前に俺は走りだした。もちろん、後ろから攻撃は来た。だが、反射的にしゃがんだため、消えたのは数本の髪の毛だけ。ハゲならば、激怒するところだが、生憎俺はあんなつるつるじゃない。と、余計なことを考えているうちに、行き止まりに来てしまった。

「やべ」

戻ろうかと思い後ろを振り返る。すると、そこには、あの子供がいた。

「やっぱり、鬼ごっこって楽しいよね。追うのが楽しい」

「ちっ。変な趣味なことで」

皮肉を言っているつもりだが、あいつは、それを褒め言葉と受け取ったらしく、妙に嬉しがっていた。

「そうか、僕の趣味は鬼ごっこ……いい、いいよ。もう、これで、趣味がないなんて言わせない。これで、僕は一歩大人の階段を登った」

喋り終わるとあいつは、静かになった。……今なら逃げれるんじゃないか？　そう思ったが、足を一歩踏み出すと、踏み出した先にあいつのＥＳＰで穴ができた。

「ダメだよ。まだあと、五分も残ってるんだから。楽しまないと」

直後、俺のいた所にあいつのＥＳＰが放たれていた。突発的に避けたおかげで、なんとか避けれたが次はない。もう、死ぬ気で逃げないと殺される。

「さぁ、第二ラウンドスタート」

あいつの声で第二ラウンドが始まった途端、俺は走り出した。無理だ。いまの俺じゃ勝てない。

なんで、なんでも消せるＥＳＰ持ってる奴と戦わなきゃいけないんだ。幸いこれはゲームだ。
逃げてもいい。逃げることが鬼ごっこなのだから。

「まてまて～」

シュン！

「うお！？」

シュン！

「う！？」

シュンシュン！

「てめえ、殺す気かよ！」
「え？　逃げるのを狩るのが、楽しいんじゃないの？　エンペラーはそう言ってたよ」
「お前らの皇帝様は、素敵な趣味を持ってるんだな」
皮肉を言ってみた。もう、これぐらいしか、格好付けられない。べつに、そんなことしないで逃げればいいだけの話かもしれないが、何かをやらないと精神的に参ってしまいそうだ。

あと、二分。ここは、しゃべって時間を稼ぐか。

「そういえば、お前って何歳だ？」
「その手には乗らないよ。どうせ、しゃべって時間でも稼ごうとしてるんでしょ？」

ちっ。やっぱ通用しないか。なら、ここは逃げるのみだ。

服はボロボロ。髪はぼさぼさ。そして、スタミナは尽きた。だが、

二分間逃げ切れた。

よくやった。よくやったよ俺。

「うん、見事に逃げ切れたね。おめでとう。じゃあ、殺すね」

「へ？」

シュン！

「うわぁあああああああああ」

第九話、マインドエナジーVS砂塵の陽炎&鬼ごっこ（後書き）

はい、こんにちは（こんばんは）皆様久しぶりです。実は最近映画にはまってしまいました。なので、更新が遅れ気味になってしまいます。いまのシーズンを見終われば早くなると思います。誠に勝手ですいません。

第十話、対立（前書き）

今回、視点がコロコロ変わります。

第十話、対立

「うわぁあああああああ」

「!?」

ザンッ!

ど、どうなったんだ。俺死んだのか? いや、でも、感触は、ある。まだ生きてる。でもどうしてだ? あいつの攻撃をまともに食らったはず。

「……大丈夫か? 兄貴」
「お前は、誰だ?」
「はは、なに言ってんだよ兄貴。俺だよ俺。不知火架昏だよ。忘れたのか? 兄貴」

お、おい、嘘だろ。なんで架昏が? あいつは死んだはずだぞ……いや、わかったぞ。違う次元だから、生きているんだ。そうに違いない。もし、もしだ、俺のいた次元にいた架昏だったとしたら、俺は……。

「兄貴。こいつは俺が食い止めておく。兄貴は早くサミエルって子を助けてきなよ。後悔したくないだろ?」
「あ、ああ。だが、お前戦えるのか? 昔から喧嘩が苦手だったろ?」
「え? 何言ってんの兄貴。俺は兄貴より喧嘩強かったじゃん。毎回兄貴に勝つもんだから、兄貴が家出したんだよな。ははは。懐かしいや」

……違う。こいつは俺のいた次元の架昏じゃない。こいつは確かに喧嘩が弱かった。周りからいじめられても反撃できない。俺が助けてやらないとダメなやつだった。なのに、この次元の架昏は……。

まぁ、今はそんなこと考えてる暇じゃない。急がないと。

第十話、対立

「さぁ、邪魔はいなくなった。聞かせてもらえる？　なぜ、同じセンティールの君が僕に刃向うわけを」

「さぁな。見ていたら体が勝手に動いちまった。ただそれだけだ」

架昏の腕がだらんと下がる。これが架昏の戦闘スタイル、アミラネルというこの次元特有のスタイルだ。腕を下げることで、腕の緊張を和らげ、血のめぐりをよくする。すると、いつもの数倍、腕による攻撃が早くなる。直也がいた次元では、まだこのことは解明されていない。ボクシングやプロレスがあるのだから解明されてもいい

だろうが、奇跡的に、発明されていない。
「ナンバー3の僕に勝てると思ってるの？　雑兵ごときが」
「ん～　雑兵をなめてると、いくら強くても足をすくわれるぞ？　いいのか、油断してて」
「ふーん。言葉で攻めるのは得意みたいだね。でも僕は引っかからないよ。僕は完璧なんだ。そんな手には乗らないよ」

夜鳩の言葉に、架昏は聞こえないように舌打ちをする。そう、架昏に、夜鳩に勝てる自信はなかった。それもそうだ。センティールという巨大なチームのナンバー3に、最近雇われた架昏が勝てるはずはない。兄の直也を助けるために行った行動だが、架昏は後悔していない。もし、死んだとしても、直也のことを思い続けるだけだろう。

シュンッ！

夜鳩の手から、見えない砲弾のような、空気が放出される。それを見たことがあるのか、架昏は、それをなんとか、横に転がることで避ける。

ジュワァアアアア

見えない空気が当たった地面は、腐るように溶けていき、三秒後にはそこが、穴と化した。
「ちっ。本当に厄介なESPだ。当たったらそくお陀仏だ」
「でもね、この攻撃をまともに受けて平然としてる人や、跳ね返してくる人がいたんだよね」

夜鳩の右目には眼帯がついている。おそらく後者により、溶けてしまったのだろう。眼帯の下は、悲惨なことになっているはずだ。
「どちらもできない俺に勝てるわけがない、そういいたいのか？」
「頭は悪くないみたいだね。理解してくれてうれしいよ」
「ちっ」
架昏は、腰のホルスターから、黒く光る拳銃を取り出す。拳銃の名前は、ベレッタM１９１５。
イタリアのベレッタ社が初めて開発した自動拳銃である。口径は９ｍｍであり弱装弾の９ｍｍグリセンティを用いる。コンパクトなため、ホルスターにはほかに、同じものがもう一つある。架昏は、同時に、９ｍｍグリセンティを取り出す。それを右手に持ったまま、架昏は、それを、夜鳩に向かって放つ。

ダン、ダン、ダン！

三発の銃弾がリズミカルに夜鳩に向かって直進する。だが、夜鳩は、それを、手についた埃のように、得意の消滅のＥＳＰで、消し去る。予想していたのか、架昏は、銃弾が消されたのを確認する前に、さらに、拳銃の引き金を引く。

ダン、ダン、ダン、ダン、ダン！

しかし、放たれた銃弾は、夜鳩に向かう前に、撃ち落とされる。ＥＳＰの応用技、テクルスと呼ばれる技術だ。テクルスは、いろんな種類のＥＳＰで実現できる。たとえば、日本で一番多いＥＳＰのファイアーのテクルスは、火を曲げたり、火で盾作るなどだが、夜鳩の消滅のＥＳＰのテクルスは、目の前に圧縮した消滅の空気を生み

出し、それに当たったものを消し去る、というものだ。

「ちっ、厄介なＥＳＰだ」

無論、そんなこと言っても、あきらめてはいない。マガジンを高速で取り換え、架昏は、そのまま、突っ込む。

「！？」

無謀ともいえるタックル。だが、夜鳩は、意表をつけられたため、避けることができなかった。

吹き飛ばされた夜鳩は、壁にぶつかる。だが、後ろの壁を消し去り、そこに、自分には効かないよう作った消滅の空気を生み出し、クッション代わりにする。

「くそっ。今のはいいと思ったんだがな」

「ふーん。今のは、マガジンを取り換えて、撃つと思わせて、タックルをするという、意表をついた作戦だね。雑兵にしてはやるじゃないか。油断しすぎたかな。これからは、ちゃんとやらないとね」

体操選手ができる、仰向けのまま、下半身を使い、起き上がる芸当。これは、夜鳩の技術ではなく、消滅の空気を上に押すことで、起き上がるという芸当だ。

「くそ。これじゃあ、いつやられるかわからないじゃないか。まったく、どうしたらいいのかねぇ」

「はぁ、はぁ。彩。あんた本当に、裏切ったの？」
「何言ってるの？　私は最初から仲間じゃないよ。馬鹿なの？」
この子。最初から仲間じゃなかったの？　そんなはずは、ない。この子と初めて会ったとき、彩は、何の変哲もない女の子だった。センティールから追われているらしいので、匿った。それが、仲間になるきっかけだった。でも、でももし、この子が最初から計算していて、今になって、裏切ったというなら納得できる。でも、でも、信じたくない。あの子が最初から仲間じゃないなんて。

ダン！

さっきから彩が私に突っ込んできて、それを、避けるということばかりが続いている。あの子は遊びみたいにやっていることだけど、正直つらい。さっき一度当たったんだけど。それが、痛い。バッドで思い切り殴られたみたいな激痛が走る。今も殴られた足が痛い。でも、そんなこと気にしてても、負ける。
私も距離を取り、負けじと、私の愛用銃、ニューナンブでの引き金

を引く。

ダン、ダン、ダン！

リボルバーなので、連射はできない。けれど、一発一発撃つのが得意な私には向いてる。

銃弾を横に、横に移動することで避けた彩は、ホルスターから取り出した拳銃の引き金を目にも止まらない速さで、引いた。

ダダン！

見えなかった。銃を取り出す瞬間しか見えなかった。銃弾は私の右足と左足にそれぞれ命中した。

「っ！？」

私は、あまりの痛さに悶絶する。けど、長くはやらない。だって、彩が、次の銃弾を撃ってきたのだから。

また、見えなかった。けど、反射的に右に転がることでそれを避ける。

「へ～　いまの動きは良かったよ、ゆりゆり」

「くっ、あぐっ」

いつの間にか彩は、私の目の前にいた。そして、私の襟首をつかんだ。

「でも、弱い。弱すぎるよ。これじゃあ、あややの興奮させることはできないよ」

「っ」

力が強まる。私は首を絞められた時のような状態になった。だめ、意識が、飛ぶ。こんなところで、死ぬわけには……。

ザシュッ！

「っ～～～～～！？」

……決まった。私のESPレンサーチャイルドが。私のESPは、一回でも見られると警戒される。だから、この二年間、一度も使わなかった。まさか、こんな形で成功するとはね。

彩の腹に刺さった槍のような、形状の棘は、釣り針のついている返しがついていて、自力では抜けない。ある意味成功すれば一発逆転だと私は思う。

「やったな。由利。まさか、私をここまでするとは……侮っていた」

ズブブ、ザァアア！

「！？」

うそ、でしょ？　返しを無視して、引き抜いた！

「お返しだ」

「！？」

ヒュン！　ザシュッ！

うっ。な、に？　見えなかった。でも、痛くない。どうして？

「！？　あんたたち何してるのよ！」

「は、はは。由利さん。俺たちは足手まといだ。だから、こんな形でしか由利さんを守れない。

こんなところで、由利さんを失うわけにはいかない。ガフッ！　ゆ、由利さん。俺たちはあなたを一生忘れません」

「「「うぉおおおおお」」」

……あんたたち。何でそこまでして……。私は、こんなことのためにあんたたちを訓練したはずじゃないのに……。

「がぁああああ」

「うわぁあああああ」

「なにこいつら。むかつくんですけど」

彩……許さないわよ。絶対に。捕まえて、みんなに謝ってもらう！

第十一話、豹変

「はぁ、はぁ。ここか……センティールの本拠地。敵がアブダクトの基地に全員行ってよかった。
もし、いたら、即見つかって殺されてたな」
にしても、なんで地上にこんなでかい建物があるんだよ。いくらセンティールの本拠地だからって、ありえんだろ……。さて、ひとしきり驚いたところで、入るか。敵がいないことを願う。

第十一話、豹変

中に入って思ったことだが、ここ、でかすぎる。人が二千人入れるぐらいの広さだ。
あまりにでかくて、一瞬見渡してしまった。いかんいかん、集中しなければ。

ロビーだろうか、そこを歩いていると、螺旋のような階段が目の前に見えた。さっき走ってきたばかりなのに、また走るとなると、疲れるが、そうも言ってられない。はやく行かないとサミエルが殺されてしまう。それは回避しなければ。息を整えて、戦う相手、螺旋階段を睨む。どこまで続いてるかわからない。けれど走り抜けなければいけない。は、ははは。全力で走るの小学校の運動会以来だ。

「負けてられるかってんだこんちくしょぉおお。うぉおおおおお」

……結果。勝ちました。三十分かかったけどなっ！。……俺撃退用に作られたとしか思えない。

こんなとこで時間食ってる暇はないってのに。ふぅ。さて息が戻ってきたし、行くか。助けに。

前までの俺なら軽く諦めてたようだが、今の俺は違う。もう、大事な仲間ができたんだ。

もう、失わない。そのために、俺が死んでも構わない。さぁ、待ってろよクソ野郎（エンペラー）

ここか……。あれから十分掛けてこの本拠地を走り回りやっとたどり着いた。王が住んでいそうな、部屋。ドアは貴族が使うような装飾をしている。蹴り破りたい気分だが、体力を消耗するわけにもいかない。きちんとドアを開け放った。もちろん、力を込めて。

ダンッ！！！！

「おい、エンペラー、てめぇ、サミエルを……？」
「なんだ貴様は」

あれ？　サミエルがいないぞ？　いるのは、悪趣味な仮面をつけた男だけ。その男は、暇なのか、一人でチェスをやっていた。

「…………」
「…………」

にらみ合うこと数分動いたのは俺の方だった。あいつの、あいつの後ろに血を流して倒れているサミエルがいたからだ。

ホルスターからワルサーと電動ナイフを取り出す。あちらは構えていない。今がチャンスだ。

ワルサーの引き金を引く。放たれた銃弾は男に向かい、あたった。

そう、あたった。なのに、あいつは動かない。あたったはずなのに血が流れない。

「……いきなり攻撃とは。どうも最近の戦士共は、気性が悪い。私に向かって銃弾を撃つなど、夜鳩しかやらないぞ。まぁ、あいつはそのせいで眼球を失ったのだがな」
「鳩だが夜だか、知らないが。てめえの後ろに倒れてるあいつはど

ういうことか説明してもらおうか」
「後ろ？　……ああ、裏切り者か。こいつはな、私に歯向かったのだ。やられるのは当然だろう」
こいつっ。殺したい、殺して殺して、後悔させてやりたい。だが、俺にはそんな力は無い。
諦めるしかないのか……。

「うぐ、がはっ！」
「!？　サミエル！」
「ううっ、な、お、や？　どう、して、来た、の？」
「何言ってんだ、お前を助けに来たんだよ！
「だ、め、だ。エンペラーに、は。かて、ない。は、やく、逃げ、ろ、な、お、や」
ここまで来て逃げろってか？　……ふざけるな。こんなといころで、逃げるわけにはいかない。こんなとこで逃げたら。俺は、俺は、絶対後悔する。そんなのはごめんだ。だから。待ってろサミエル。
俺がお前を救い出してやるから。

「ふむ。私を見たり聞いたりした者はたいてい、怯えるのだがな。
やはり、貴様は違うな。
どうだ、センティールに入らないか？　私がお前をNo．2にしてやろう」
「ふ……け……な」
「何か言ったか？」
「ふざけるなよクソ野郎。誰がてめえのチームになんか入るか。俺はなアブダクトなんだよっ！
裏切るわけねえだろクソ野郎がぁあああああ」

ダンダンダン！

俺のワルサーから銃弾が三発飛び出す。怒りのせいか、少しぶれたが、人間という大きな的には当たる。だが、やはり当たってもあいつから血が流れない。

「ふむ。交渉決裂と、言うわけか」
「なんでだ、銃弾が当たってるのに、なんで」
「私がなんと呼ばれてるか知っているか？　エンペラーだよ。日本語に訳すと皇帝だな。
皇帝はな、すべての人々の頂点に立つのだよ。だから皇帝に庶民が攻撃しても無意味なのだよ」

くそっ。これがエンペラー。皇帝か。無理だ。勝てない。こんなやつに勝てるわけがない。
くそっ。ごめんみんな。ごめんサミエル。俺は最後の最後で諦めてしまった。
すまない……。

『諦めるのもひとつの手だよね。人間はそれを繰り返していくことで生きていくんだから。
じゃあ、もらうよ。マスター。あなたの体を。ふふふふふふ』

ぐ、あああ。な、ん、だ。この痛み。ぐ、あああ。

「ぐ、ぁああああああああああ」
「！？　急に叫んだかと思えば。どうしたのだ。私は攻撃などしていないのに」

「く、くくく。ははは。アーッハッハッハ！！！！　もう、自由だ。自由なんだよ！　この気持ちがわかる？　やっと外に出れたんだ。これほどまでに嬉しいことはないよっ！」
「……自暴自棄になったか。まぁ、それも人間がすることだから仕方あるまい」
「何しようかなぁ♪。まずは、うん。そうだね。邪魔な君を殺そうか。目障りなんだよね。前に人がいると。死ね」

ダンダンダン！

「!？　……ふっ。銃弾は効かないと分かっているはず、だ？　なん、だと。私の体を、貫いた、だと。
ごふっ。ま、さか、そんなことあるわけ」
「何言ってるの？　頭おかしいの？　ねぇ。君のＥＳＰはテラリフ

レクトとテラサブソープションだよね？　完璧だと思われがちだけどそれには弱点が存在する。そう、油断しているときに攻撃しればいいんだよ」

「ま、さか。こんなところで破られるとはな」

「フフフ。今の僕はね、マスターを超えたんだ。だからね。僕は優しくないよ。邪魔だから消えてね」

ダダダダダダダダダダダダダ！！！！

思えば。私が皇帝になる前、私はただの雑兵に過ぎなかった。昔の皇帝は私の実の兄。＊＊＊涼だった。兄は厳しかった。母が死んだ時から変わってしまった。毎日が訓練だった。

厳しい父に、私はいつからか、恨むようになっていた。だが、恨んだところで勝てるわけがない。

相手はセンティールの皇帝、勝てるはずがない。それからというもの、私は毎晩兄をどうやって倒そうか、考えていた。寝首をかいてもおそらく反撃されてしまう。そうしたら私は一気に兄からの信頼がなくなる。そうなったら最後、私は一生雑兵になってしまう。それは防がねば。

だが、幾日かしたあと、気づいた。そうだ、私にはあの男がいるではないか。私の父、＊＊＊和也が。いまは行方を晦ましているが、連絡が取れないことはない。

後日私は父に連絡を取った。手術をしてくれないか？　と。科学者な父は、やはりというか、快く受け入れた。その日のうちに私は、手術を受けた。テラリフレクトとテラサブソープションと言う名のＥＳＰを。

そうして、私はその力を使い兄を倒し、皇帝の座を奪い取った。それからだった。私がなにものにも興味をなくしたのは。もう、興味がわくものがない。

センティールのナンバー2、3、4、5を作っては見たが、どれも興味が湧かなかった。

そんなときだった。暇を持て余し、入り込んだネズミを倒し、チェスをしていたとき、あいつが入ってきた。そう、不知火直也だ。あれを見ているとどうも懐かしい気分になる。なぜだろうか。

興味が湧いた。だが、私は負けてしまった。なぜか豹変したあいつに、私はまけてしまったのだ。

第十二話、兄と弟

う、うう。ここは……。！？　檻だと。な、なんで、檻に入ってるんだよ俺。俺はたしか……そうだ、センティールの皇帝と戦って、それで……。

負けた。

負けたから俺は檻に入れられているのか？　……いや、違うな。ここはなんだか、嫌な感じがする。

マインドエナジーになっているときと同じ感じがする。今までは何気なく感じていたあの感じ。

いまは恐ろしいほどに感じる。なんなんだいったい。

ガシャン

「誰だ！？」

「う、怒鳴らないでよ。耳に響くから」

「誰なんだ」

「僕？　僕はね。なんて言ったらいいのかな。うーん。あれだよあれ。精神体。でも、今は弟に乗っ取られてるけどね。ははは……あんのくそやろうが。僕が深い眠りに付いているときを狙いやがって。殺したい。殺したい殺したい殺したい殺したい殺したいぃいいいい。あああ、殺したいぃいいいぃい」

なんなんだこいつ。説明が意味わからないし。暴走したたし。まぁ、そんなこと気にしてる暇ないな。

問い詰めてここからでないと。

第十二話兄と弟

問い詰めてみると、こいつはずいぶんおとなしくなった。睨みをきかしたおかげかな？

「で、ここはなんだ？」
「え、えーとね。ここはね、君の精神世界って言えばいいのかな」
「精神世界？　俺の？」
「そう、君の精神世界。精神世界については僕が念で教えてあげるよ」

！？　すごい、情報が頭に流れ込んでくる。精神世界。それは、人が必ずしも持っている精神という力が具現化した世界。通常人は、具現化した世界を見ることがない。けれど、たまに、見れ人がいる。
……それが、俺ってことか。

「ん？　なんで俺自身が自分の精神世界にいるんだよ」
「それは……あいつが君を乗っ取ったからだよ」

あいつ……さっき言ってた弟か。今頃俺はあいつに操られてるのか。

「どうやってもどるんだよ」

「たぶんだけど、この檻さえ破れれば出られると思うよ」

「たぶんかよ……まぁいい。力を貸してくれ」

「僕はなんの力もないよ」

「はぁ!? 冗談だろ。俺一人でここ破れと? 無理だ。俺はな、普通の高校(だった)生なんだよ」

今はESPという力があるが、あれは自分自身の体でも動かさないと使えないしな。

「うーん、そうだね。僕は力は無いけど知恵を貸すことはできるよ。例えばほらあそこ。切れ目があるでしょ? あれはね、不甲斐ない弟が見逃したやつなんだよ。だから、あそこに生命力をぶつければ。破れるはずだよ」

生命力をぶつけるって……そんなことできるわけないだろ……でも、やるしかないんだよな。

あいつの念から送られた情報だと(わかってるじゃないかこいつ)、自身の中にある一番でかい感じのエネルギーが生命力らしい。他に色々と感じるが今は生命力だけでいい。

「は!」

ボウン

……なんだこの煙。

「失敗だね。あ、それ何回も出すと君の体が停止して死ぬからね♪」

おちゃらけやがってこのやろう。そう何度も失敗はできないな。やるしかないか。

「は！」

ボウン

……

「は！」

ボウン

……

「……はぁ」

もう、なんかさ、俺さ。なんでこんなに頑張ってるんだろ。もう、いいじゃないか。俺はこの次元に着たくてきたんじゃないし。もう、仲間なんていらない。……もう、やめよう。元の自分にもどるんだ。

「……止めはしないよ。君はそういう性格だったしね。この次元に来てからおかしくなったんだよ。君の性格は。内気から陽気に変化した。でもね、考えてみてごらん。なぜ、君はこの世界に来たのかを」

「…………」

そういえば、なぜ俺は意味もない考えにとらわれたんだろう。鏡なんて俺は探そうとは思わなかった。けれど、体が勝手に動いた。あ

れは俺自身の行動ではなかった。……ではなぜ、俺は鏡なんて探したんだろうか。……謎だ。

「……まぁ、どう考えようと君次第だよ♪　もしかしたら神様の仕業かもしれないしね。

とりあえず。ここを出ようよ♪」

「ああ、わかった」

今は何も考えなくていい。ここを出ることさえ考えればいい。

「……は！」

ダダダダダダ！

俺の拳銃はもう、無い。だから、そこらへんに落ちてるフルオートマシンガンを広い、夜鳩に向けて撃ちまくる。

「はぁ。全く。君は何を考えているんだかわからないね。意味もな

い銃弾を無駄撃ちするなんて」
「はぁ、はぁ。うるせぇ。黙ってろ」
チャキ。もう疲れはてて腕が上がらない。けれど、なんとか銃身を夜鳩に向ける。
「無駄無駄。無駄だよ。そんなちゃちな銃。すぐに消してあげる」
シュン
「ちっ」
あいつが言った通り、俺が持っていた銃は消しされれた。これでもう、武器はない。
追い詰められた。まずいな。雑兵の俺もここまでか。
「死ね」
シュン！
「ぐあぁあああああああ」

「きゃはははははは。もう、動けないのぉ？　ゆりゆりー。きゃはははは」

「はぁ、はぁ」

もう、ダメみたい。足は両足撃ち抜かれて、血が絶えずに出てくる。両腕は、もうさっきから撃っているＤ・Ｅ（念のためホルスターに入れておいた）による反動で、使い物にならない。

「きゃははは。まだまだ遊ばないとねぇ」

「くっ、う、がは」

彩の絶え間ない銃弾（皮肉にもゴム弾で）により、私は腕で耐えるしかない。う、もう、腕の感覚がない。あと何発耐えられるか。

「……もう終わりか。橘由利」

「へ、へぇ。私の苗字知ってるんだ。誰にも話したことないのに」

「そんなこと我々センティールには動作もない」

さすがはセンティール。その情報網は完璧ね。……彩には勝てそうにない。こうなったら。一秒でも彩を足止めしないと。

「そういえば。彩。あんた私の部屋にあれ隠してるでしょ」

「!?　なに言ってるのかなぁ。何も隠してないよぉだ、べー」

「ふーんじゃあ、捨てていいのね。あれ」

「！？」

しめた。この話なら時間を伸ばせられる。

「とまぁ、慌てたところで由利。お前。時間稼ぎをしようとしているだろうばればれだ」

「ちっ」

やっぱ無理よね。く、う、もう、だめ。睡魔が。痛みが引いていく。もう、ダメなのかな。

「ふ。橘由利。終わりだ」

ザシュウウウウ

第十三話、終わりの時

「く、ふふふ、ははは。ふはははははは。やるじゃないか。不知火直也。私に手傷を負わせるとは。
それに私のESPを知っているみたいだな。生かすわけにはいかない。ここで死んでもらおう」
「誰がお前にやられるか馬鹿野郎が」
『だせ、だせぇえええええ。僕は、僕はお前(マスター)を閉じ込めたはずだ。なんで、なんで、出た」
なんか、現実と、心の中が五月蝿いが。気にしない。とりあえずは、現実から片付けよう。

「う、うう。直也。ダメだ。そいつには敵わないやめてくれ」
俺の近くに倒れているサミエルが目を覚ました。もう喋るのもままならない様子だ。早くかたずけないと。悪い。サミエル。あとでなんか買ってやるから許してくれ」

「ん……！？」

しっかし、女子の唇ってなぜ、こんな柔らかいんだろうか。おっと、いかんいかん。そんなこと考えている訳にはいかない。
「な、な、な、にゃにお。しゅるんだ、なおや」
「あとで理由を話してやる。だから今は眠っててくれ。あとでまた会おう」

バシュ

「な、お、や」

ここからは血なまぐさい戦いになる。こいつには見せられないからな。ほんとに後で何かおごってやるからな。

第十三話、終の時

さて、体の芯から血液がめまぐるしく回っている。相変わらず、気持ちいいな。この感じ。

「ふむ。マインドエナジー。厄介だが、私のＥＳＰには勝てない」

「それはどう、かな！」

ダン

チーターもびっくりなスピードであいつに向かって飛んだ。そう、飛んだ。走ったではない。飛んだんだ。あいつの能力はさっき情報として頭に流れ込んできた。テラリフレクトとテラサブソープション。絶対防御と絶対反射。通常ＥＳＰは一人につきひとつだけど。例外が存在する。それは、あの男により二度目の手術を受けた人だ。二つのＥＳＰを操るには膨大な精神力が必要となる。なので、普通は、二つのＥＳＰ耐え切れずに動脈やら軽脈やらが切れて、死ぬ。

けれで、あいつは尋常なほどに精神力があると見た。だが、いくらたくさんあると言えど、そう何回も使えないはずだ。それが隙を生む。

ダンダンダン！

ホルスターからワルサーＰ３８を一秒にも満たない速度で抜き取り、トリガーを引く。

しかし、その銃弾はあいつのＥＳＰにより、反射される。こっちの来た銃弾は、さっき一緒にホルスターから取り出した電動ナイフで半分に切る。

「ふむ。やはり尋常じゃないほどに身体能力が上がるな。だが、それだけだ。私のＥＳＰには敵わない」

まぁ、そうなんだけどどな。俺のＥＳＰマインドエナジーは身体能力と思考が何倍にも膨れ上がるが、所詮それだけだ。このＥＳＰより性能がいいＥＳＰは他にもある。それには敵わない。

ダン！

無駄だと分かっていても俺はワルサーの引き金を引く。

「無駄だ」

だが、それはやはり反射して俺に向かってくる。また電動ナイフでそれを半分にしたあと、また引き金を引く。

ダンダン！

「まったく無駄だと知っていながらなぜ、同じことをするのか、私はわからない」
「無駄と分かっていても人は同じことをするもんなんだよ」

ダンダン！

先程の二発にさらに二発を当てる。ビリヤード撃ちといったところか。加速された銃弾はあいつに向かって飛ぶがなにかに邪魔されてそのまま地面に落ちる。これがテラリフレクトか。厄介だな。

「本当にお前は惜しい男だ。それほどまでの力があればナンバー2になれたものを」
「お前の下に付くなんてまっぴらゴメンなんだ、よ！」

銃撃はやめて、俺は電動ナイフでの戦闘に変える。スイッチを押し。切れ味を増した電動ナイフで、あいつに切りかかるが。やはり何かに邪魔されてあいつに攻撃が届かない。

「ふ、やはり所詮はアブダクトだな。我々センティールには敵わない。もう、君の仲間は、私の部下に殺されているだろう」
「あいつらはそんなやわじゃない。今頃倒してるだろうよ」
「ふ、戯言を」

さて、銃弾があと七発しか残ってない。電動ナイフでは勝てないし。どうするべきか。

「!?　がは。くっ」

なんだ？　なぜ、あいつが血を吐く。俺の攻撃はあたってないはずだ。……考えられれるのは、あいつの弟がなにかした。だが、どう

やって？　……まぁ、いいか。今はチャンスだ。このチャンスを逃すわけにはいかない。

ダンダンダン！

「ぐ、が、がは」

あ、あたった。それも全部。なんか信じられないな。あれほどまでに余裕かましてたのに。

「く、くふふ。やるな。だが、もう終わらせる。ここまでやられたのは久しぶりだった。楽しかったよ。不知火直也。我祖父よ」

ん？　なんかいま聞捨てならないことが聞こえたような。

「もう、この仮面はいらないな」
「な！？」

あいつが仮面を外すとそこには俺と瓜二つの顔があった。は、ははは。なに仮面かぶってるんだ。このやろう。

「安心しろ。この顔は仮面ではない」
「ならなんで、俺の顔なんだ！」

さっきあいつは俺が祖父だと言った。ならあいつは俺の孫だということに、ならないか？
いやいやいやいやいやいや。そんなわけなない！　俺に妻なんていないない！　子供だっていない！

なにより、俺は爺さんじゃない。

「ふ、ふふふ。なぜ、あなたがここにいるのか。私は不思議でたまらない。これは神によることなのか。それとも、偶然なのか。わからないな。だが、生かしておくわけにはいかない。私の親族だとしても、知られてはな。これから私は第三のＥＳＰテラブレイクを発動する。これは、この基地を破壊するほどまでの力がある。さぁ、どうする。祖父よ」

はぁ。第三のＥＳＰとかありえないから。どんだけ精神力あんだよこいつ。さて……もう打つ手がないな。ここで死ぬのか。ははは。

……死ぬわけないだろぉおおおお。

「うぉおおおお」

サミエルを抱きかかえ、俺は後ろにあるドアを蹴り破り螺旋階段を飛び降りる。

ズドン！

地面にクレーターが出来た。俺はあまりの痛さに悶絶しそうになったが、なんとか耐えて。

そのまま、出口に向かう。微かにだが、あいつの笑い声が聞こえる。

まったく狂喜してるのかただ笑っているのかわからないな。

ドガガガガガガガガガガ！！！！

基地が崩れていく。あまりのでかい音に俺は耳をふさいだ。

基地が崩れていくさまを見て、俺は思ったことがある。この次元は争いの次元なのだと。

平穏の次元と争いの次元、か。全く何を考えているのかわからない な神というものは。

「ふぅ。終わった。疲れたな。もう、眠い。サミエル。よかっ、た……」

バタン

「!? まさか。皇帝が負けた？ そんな馬鹿な。あいつは、あいつは。誰よりも強い。なのに、なんで……」

「はぁ、はぁ。これで、俺たちの勝ちだな。助かったぜ兄貴。いや、爺さん」

「くっ。ここまでだな我々の主が負けた。これでもう戦う必要がなくなった。またいつか会おう。

橘由利」

「待ちなさい！　彩！」

2060年。アブダクトとセンティールの戦いは、センティールの長、神楽坂舞斗が敗北したことでアブダクトの勝利に終わった。だが、アブダクトは多数の死者をだした。これにより、アブダクトは戦いには勝ったが、皆、悲しみの毎日を送ることとなった。

センティールの長、神楽坂舞斗を倒した不知火直也は、サミエルを置いて、忽然と姿を消した。

不知火直也は、元の次元へと帰っていったが。一年後。また彼は争いの次元へと送り出されることになる。

第十三話、終わりの時（後書き）

はい、これで第一部完結です。次はプロフィールを挟みつつ、第二部へと移ります。まだまだ、感想もお気に入りも少ないこの小説ですが。精進していきますので、応援してくれるとありがたいです。

では、また会いましょう。

プロフィール1（前書き）

作ってみましたプロフィール。

プロフィール１

主人公

名前、不知火直也（しらぬいなおや）

年齢、１７歳

星座、血液型。しし座、A型

身長、体重。１６７センチメートル。６４キロ。

髪、目。やや、肩にかかるぐらいの髪で、純日本色の黒色。ややつり目な目で、色は、髪と同じ黒。

ESPとその説明。マインドエナジー。他人と接吻（男でも可）することで、常人の１０倍の身体能力、判断力、頭脳などを得ることができるが、あまりの負担のため、５分間で効果は消え、全身に痛みが走る。別名、代償の力。ESPランク（F~Sまである）S

好きなもの。本、動物、ぼーっとすること、昼寝。

嫌いなもの。世界、神、昼寝を邪魔すること。

プロフィール。

平穏の次元と呼ばれる世界から争いの次元という別次元に鏡により来てしまった。

１０年前、母親を強盗に殺されたことから、徐々に心を閉ざしてい

った。父親は五歳の時、弟は、七歳の時に事故で死亡しており、さらに心を閉ざす原因となっている。世界に落胆し、神をもいらない存在だと考えている直也だが、争いの次元に飛ばされてからは、仲間という存在により、徐々に光を取り戻していった。

メインヒロイン、サブヒロイン

名前、橘由利。

年齢、１６歳。

星座、血液型。おとめ座、Ｂ型

身長、体重。１５９センチメートル、５２キロ。

髪、目。地毛のセミロングな髪で、栗色。琥珀（アンバー）色のつり目で。

ＥＳＰとその説明。レンサーチャイルド。自身がピンチになったとき、任意で発動することができる。敵に、刺がついた槍を突き刺すことや投げることができる。だが、余りにも動作がわかりやすいため、一発しか、敵には通用しない。ＥＳＰランクＣ。

プロフィール。

直也がいた平穏の次元の直也のクラスメイトにして、クラス委員長橘愛理の孫。正倉学院元生徒会長。
自分はリーダーの器だと、祖母から言われた時から、正倉学院の生徒会長になることを決めていた。
正倉学院が閉鎖されてからは、アブダクトのリーダーとして、頑張っている。その白い肌と、琥珀色の瞳から、周りは由利のことを、ホワイトウルフと呼んでいる。

名前、サミエル・ドライ・アーマリス。

年齢、１６歳。

星座、血液型。うお座、ＡＢ型。

身長、体重。１５８センチメートル、４８キロ。

髪、目。腰まであるロングヘアー。アホ毛みたいな地毛がところどころにある。紫色の髪。
ややタレ目の形で、青紫色（ヴァイオレット）。

ＥＳＰとその説明。テレニオン。自信の考えを他人に頭に直接伝え

ることができる。ただし一度使うと一時間は使うことができない。

ESPランクD

プロフィール。

六年前、姉ミハエルとともに日本へと渡ってきた。世界中で、ESPが知られている中、イギリスがこの二人を日本へ送り、手にしたESPをイギリスに持ち帰るという手筈だったが、何者かに邪魔をされて、日本にとどまることとなった。普段は自分のことを読まれないために、性格を大幅に変えている。センティールの鍛治師と呼ばれるほどに、鍛治力を鍛えている。サミエルはセンティールに入った時から、不治の病に侵されている。寿命は6年。

プロフィール1（後書き）

いやー　なんか疲れました。なかなか筆が進まなくて（汗）

プロフィール２（前書き）

お待たせしましたー。プロフィール第二です。ではどうぞ。

プロフィール２

敵主要人物。

名前、水瀬彩（みなせあや）（アブダクト所属時）本名、綾女彩（あやめあや）。

年齢、１６歳。

星座、血液型。しし座、Ｂ型。

身長、体重。１４８センチメートル。４５キロ。

髪、目。腰まである金色のロングヘアー。エメラルドのような緑色の瞳、ややたれ目。

ＥＳＰとその説明。ＥＳＰチャージ。他人のＥＳＰを盗むことができる。だが、ストックは二つまでと決まっており、三つ目からは、上書きされる。ＥＳＰランクＳ

好きなもの。皇帝、強いこと、恋。

嫌いなもの。弱いこと、金属。

プロフィール。

幼少のころ、ある男により、イギリスから無理やり連れてこられた十人のうちの一人。

生まれた時から非常に体が弱かったため、イギリスからは日本に送るいい材料として、育てられた。

食べ物をろくに食べれなかったため、背、体重は一般の女性より低い（軽い）

センティールの皇帝に気に入られた彩は、センティールに入ることを決め、厳しい訓練を開始した。

争いが始まってからは、アブダクトにスパイとしてもぐりこんでいた。

名前、神楽坂舞斗。

年齢17歳。

星座、血液型。おひつじ座、AB型。

身長、体重。170センチメートル。68キロ。

髪、目。後ろで縛っているが本当は腰まである銀髪。仮面で隠れているが、緑色の瞳で、ややツリ目。

ESPとその説明。テラリフレクト。テラサブソープション。テラブレイク。テラリフレクトは、自身の周りに見えない壁を出現させ、それで身を守ることができる。ただし、自身の体重の100倍まで。テラサブソープションは、自身に危害を加える攻撃をすべて跳ね返すことができる。ただし、不意を突かれる攻撃は跳ね返せない。テ

ラブレイクは自身の精神力をすべて爆発させて、それを攻撃に移すことができる。ただし、一度使うと自身は重傷を負うか、死ぬ。ESPランク上から、S、A、S。

好きな物。なし。

嫌いなもの。人生。

プロフィール。

前センティールの皇帝、神楽坂雄太を暗殺し、自分の父、神楽坂佐助からESPを三つ手術で手に入れる。舞斗が皇帝になってからは、冷戦していた争いを始めてしまった。自身の祖父、不知火直也をとても尊敬していたが、ある日、それも夢に終わった。

センティールの皇帝になってからは、毎日、綾女彩を訓練してきた。だが、ある日を境に彼はなにもかもどうでもよくなってしまう。仮面をつけ、誰にも顔をさらさなくなった。

プロフィール２（後書き）

さて。まだ人物はいっぱいいますが、主要人物はだいたいこれだけなので、割愛させてもらいます。まだまだ駄文ですが、なにとぞよろしくおねがいします

＞m（＿＿）m＜

第十六話、未来というなの世界　（前書き）

はい、お待たせしました。今回から新しい話が始まります。
まだまだ未熟者ですがよろしくお願いします。

第十六話、未来というなの世界

この国、日本。何万、何千、何百年と戦を繰り返してきた。勝つこともあれば負けることもある。
そんなギャンブルみたいな争いを幾度なく繰り返してきた。それは別次元にある違う日本といえど同じこと。

「真琴、そっち行った！」
「おうよ。さぁ、もう逃げられないぜ」
「……は、てめえらに捕まるぐらいなら俺は自害するのを選ぶ！」

ここは、争いが絶えない世界。前回の戦いより、三年後に未来である。昔のように対立して戦うというものはなくなったが、ＥＳＰという力とセンティールの名残がある限り、戦いは消えない。
今現在、戦う者は、前回の戦いで生き残った者たちだが、ほかに、他国から来た者もいる。
学校はほとんどが閉鎖していたのだが、現在、学校は二つだけ、開校している。大人という存在が、激しい争いがなくなったため（争いはまだある）現れたためだ。名前を、変え、二つの学校は、西武武闘学院。南部ＥＳＰ学院となっている。

「おい、まて！」
「…………」
「ちっ。犯罪者のくせに、プライドだけはあるんだな。」
「まぁ、死んでしまったのは駄目だけど。連れて行きましょ」

二つの学院には、犯罪者取締り制度というものがあり、犯罪を起こしたり、むやみな争いをしたりした人を取り締まる制度がある。争いをするときは、ひとを殺してはいけない。どちらかが負けを認め

た時点で戦いは終わらせなければならない。が、中にはそれを守らない人もいる。なので、この制度だ。ほとんどの生徒はアブダクトの人たちだが、中にはスパイとしてまぎれている人もいる。

「あー、つっかれたぁ。三時間も追うなんてもう無理だぁ」
「まぁ、私も疲れたし、同感」

キィイイイイイイ！

「「！？」」

「なんだ今の音」
「行ってみましょ」

ここは、どこだ？　確か俺は自分の家にいたはず。なのに、外にいる。……うーむ。なんか昔にこんなことあったような……。ああああああ！　ま、まさか、まさかまさか！　また来たのか？あの次元に。ウソだろ……。俺はただ、眠ってただけなのに。

「理不尽だ……」

もうこの言葉は三年前から使ってないんだがな。また使う羽目になったな……。

にしても、ここ、どこだ？　あんなでかい建物あったかなぁ。

チャキッ

ナンカイマ後頭部に当たったようなキガー。キノセイダロウカ。

「ねぇ、君。僕の縄張り（エリア）でなにしてるの？　返答次第では殺すよ？」

「まてまて。俺はどこからどうみても、一般人だろうが」

「この世で一般人なんか存在しないんだよ。さぁ、死ぬか、殺されるか選んでよ」

どっちも同じじゃないか。こんなとこで死ぬわけにはいかない。逃げる！

「へぇ。逃げるのを選んだか。でも、遅いね。その速さじゃ弾丸より遅い。Ｐｒｏｄｏｔｔｏ　ｕｎａ　ｍａｌｅｄｉｚｉｏｎｅ　ｉｎ　ｉｎｆｅｒｎｏ；　ｓｏｎｎｏ；　ｃｉａｏ（地獄で呪うんだね。ばいばい）」

ダンッ！

今日はあいつに仕事を押し付けられたため、あの恐ろしい殺人鬼がいるエリアに、仕方なく向かった。まったく、私は死に急ぐようなことはしたくないのに。でもまぁ、私のＥＳＰステルスがある限り、見つからないし、大丈夫か。

その時だった。前方から銃弾の音がしたのは。

ダンッ！

「っ。まさか、誰かあいつに見つかったのか。いや、それ以前になぜ、ここに人がいるんだ」

私は、焦っていた。あの殺人鬼がもし誰かと戦っていたら、止められるのか。でも、見捨てるような恥じるべきことはしない。たとえ自分が死んでも。

私は前方に向かって走った。ステルスを解除して、愛刀、鮫肌を鞘から抜いて。

「そこまでだ！」

「そこまでだ！」

突然後ろから聞こえてきた声に俺はびっくりして、思わず振り返ってしまった。すると、どうだ、もう数センチぐらいのところに、銃弾があった。声の主がそれを切ったおかげで、なんとか無事だったが、もしも、声の主が銃弾を切ってくれなかったらと思うと、冷や汗がでる。

「あのありがt「下がっていろ！　足手まといなのだから！」す、すまない」

文句は言えないな。助けてくれたんだから。

「へぇー。よくあの弾丸を切れたね。褒めてあげるよ。でも、君は僕の手によって死ぬんだから、褒めても仕方ないか。ふふっ」

さっきから何言ってんだあの黒一色やろうは。そんなに殺したいのか、殺人鬼かよ。

どうしよう、前みたいに俺に力があればいけるだろうけど、またあるとは限らないしな。

「ブラック・ライラ・ノーバス。イギリスで、有名な殺し屋。だが、あまりにも危険なため、政府から抹殺の指令がでた。だが、それを予知して逃亡。日本にやってきた」
「へぇ、よく調べてるね。でも、間違いが一つ。その政府はもう僕が滅ぼしたよ。日本に来たのは強そうな奴がいると思ったからだよ。でも、拍子抜けしたよ。まさか、こんなに弱いなんてね」
弱いって、ここが前の世界だとしたらＥＳＰ使いがごろごろいるだろ。それを弱いって……こいつ何者なんだいったい。
「ふ、貴様のやったことは、犯罪者がすることだ。よって、貴様を逮捕する！」
「やってみなよ、できるものならね」

キン、キン！　カッ！
「へーやるね。僕の剣技を捌く、か！」
キン！

「ふ、まだまだだ、な！」

これは嘘だ。私にはあいつの剣技が少ししか見えていない。早すぎる。これが本当の剣技というものか。……それより、あいつは、何をしているんだ。早く逃げないとお前まで殺されるぞ。

だが、それをあいつに言う隙がない。それほどまでに、あいつの剣技が早すぎる。

「剣聖乱舞！」

「な！？　ぐ、あぁ」

また加速した。捌きれな、い。ぐ。脇腹を切られたか。だが、まだいける。

「百花繚乱！」

これは、私の最高の技。昔、天才と呼ばれた兄を倒した技でもある。

「みえみえだ、よ！」

カン！

「ぐっ」

鮫肌が切られた！？　そんな馬鹿な。あれはミスリル合金でできた刀だぞ。それを普通の鉄の刀で切るなど……ありえない。化け物か、こいつは。

「はっ！」

「くっ」

ザシュッ！

く、そ。胸を、刺された。息が、息が苦しい。だが、負けるわけにはいかない！

「は、ぁああああ！」

カン！

「へー。折れた刀でそこまでできるか。うん、見事だ。君は僕がたたかった中で二番目に強い。でも、それだけだ。もう興味が失せた。消えな」

「くっ！？」

ザシュウウウウウウ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8887w/

平穏と争いの次元

2011年11月27日20時57分発行